

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(17)

宮之浦港改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

火ノ上山遺跡

1996年3月

鹿児島県埋蔵文化財センター

序 文

屋久島は、1993年に自然遺産として世界遺産リストに登録されたように豊かな自然に恵まれた島で、昔より多くの人々が生活を営み、文化を育んできました。その結果、多くの有形・無形の文化財が残され、埋蔵文化財につきましても多くの遺跡が確認されています。特に、一湊松山遺跡につきましては、昭和26年より数回の調査が行なわれ、多くの成果が得られています。

今回調査を実施しました火ノ上山遺跡は、熊毛郡上屋久町宮之浦にある遺跡です。調査は、宮ノ浦港改修工事に伴う新設道路建設に係る緊急発掘調査で平成5年・7年と二度にわたり実施されました。その結果、屋久島・種子島特有の上能野式土器を中心多く出土しました。新たな成果が得られ、それらを本書にまとめました。本書が、広く活用され、県民の皆様の埋蔵文化財に対する関心とご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、文化財保護の主旨をご理解いただき、本遺跡の発掘調査に多大なるご協力を賜りました上屋久町教育委員会はじめ各関係者に対して心より感謝の意を表します。

平成8年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 内村 正弘

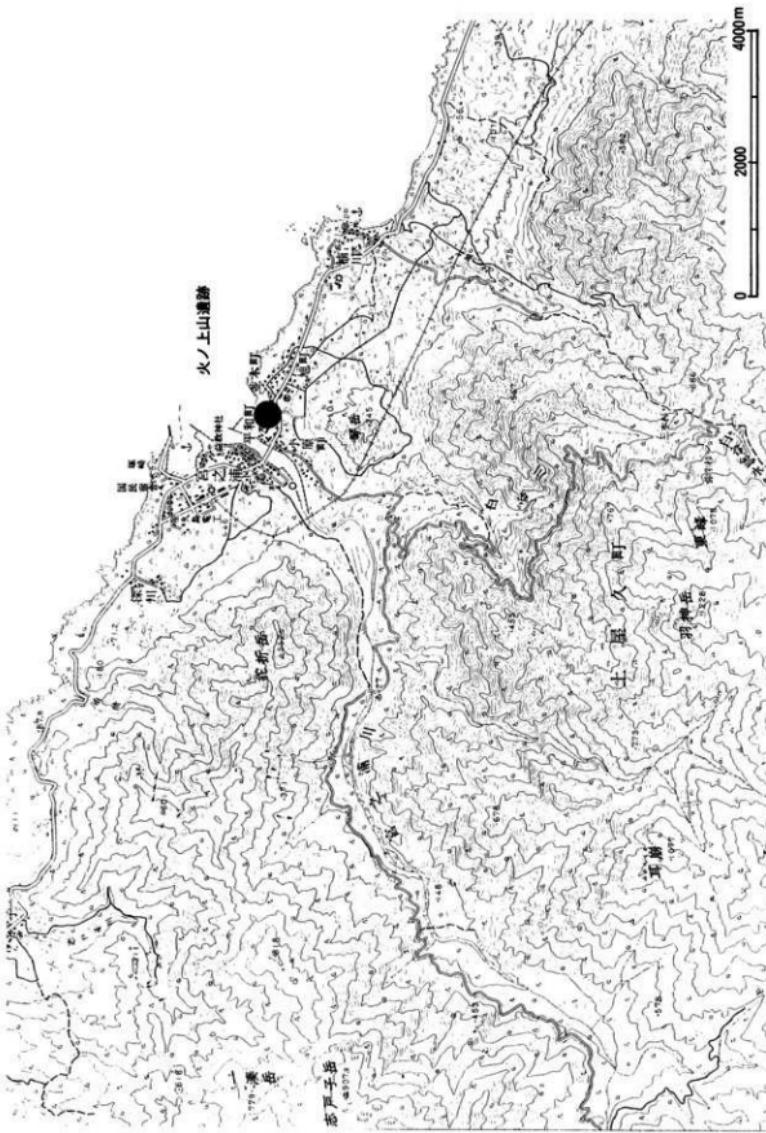
報告書抄録

ふりがな	ひのかみやまいせき
書名	火ノ上山遺跡
副書名	宮之浦港改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	17
編著者名	倉元良文
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-56 鹿児島県姶良郡姶良町平松6252番地 TEL0995-65-8787
発行年月日	西暦1996年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
火ノ上山遺跡	鹿児島県熊毛郡 上屋久町宮之浦 火ノ上山	465038	82-14	30°25'30"	130°34'19"	19930607~ 19930706 19950829~ 19930928	445	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
火ノ上山遺跡	包含地	弥生~古墳		入来式土器 山之口式土器 成川式土器 上能野式土器 石皿 すり石等	

第1図 道路位置図



例　　言

-
- 1 本書は、鹿児島県熊毛郡上屋久町宮ノ浦の宮ノ浦港改修に伴う新設道路工事に係る緊急発掘調査報告書である。
 - 2 本調査は、鹿児島県土木部の依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
 - 3 遺物番号は、本文及び挿図・図版の番号と一致する。
 - 4 発掘調査における測量・実測・写真撮影は、倉元・下薙が行なった。
 - 5 本書掲載の出土遺物の実測及び淨書・遺物写真撮影・編集は、倉元が行なった。
 - 6 遺物に関する指導・助言は、河口貞徳氏に依頼した。
 - 7 本遺跡の出土遺物・図面・写真は鹿児島県立埋蔵文化財センターが、保管し、活用する。
-

目 次

序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言
目次

第Ⅰ章 調査の経過	7
第1節 調査に至るまでの経過	7
第2節 調査の組織	7
第3節 調査の経過	8
第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境	10
第Ⅲ章 平成5年度の調査	12
第1節 調査の概要	12
第2節 遺物	18
第Ⅳ章 平成7年度の調査	22
第1節 調査の概要	22
第2節 層序	27
第3節 遺物	27
第Ⅴ章 まとめ	62

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	23
第2図 通路周辺・トレンチ配置・グリッド配置図	11
第3図 1T・2T土層断面図	13
第4図 3T・5T・6T土層断面図	14
第5図 9T・10T・11T土層断面図	15
第6図 トレンチ出土遺物(1)	16
第7図 トレンチ出土遺物(2)	17
第8図 トレンチ出土遺物(3)	18
第9図 トレンチ出土遺物(4)	19
第10図 トレンチ出土遺物(5)	20
第11図 II層遺物(土器)出土状況	23
第12図 III層遺物(土器)出土状況	24
第13図 IV層遺物(土器)出土状況	25
第14図 II~IV層遺物(石器)出土状況	26
第15図 基本土層図	27
第16図 調査区出土遺物(1)	28
第17図 調査区出土遺物(2)	29
第18図 調査区出土遺物(3)	30
第19図 調査区出土遺物(4)	31
第20図 調査区出土遺物(5)	32

第21図	調査区出土遺物(6)	33	第33図	調査区出土遺物18	45
第22図	調査区出土遺物(7)	34	第34図	調査区出土遺物19	46
第23図	調査区出土遺物(8)	35	第35図	調査区出土遺物20	47
第24図	調査区出土遺物(9)	36	第36図	調査区出土遺物21	48
第25図	調査区出土遺物00	37	第37図	調査区出土遺物22	49
第26図	調査区出土遺物11	38	第38図	調査区出土遺物23	50
第27図	調査区出土遺物12	39	第39図	調査区出土遺物24	51
第28図	調査区出土遺物13	40	第40図	調査区出土遺物25	52
第29図	調査区出土遺物14	41	第41図	調査区出土遺物26	53
第30図	調査区出土遺物15	42	第42図	調査区出土遺物27	54
第31図	調査区出土遺物16	43	第43図	調査区出土遺物28	55
第32図	調査区出土遺物17	44			

表 目 次

第 1 表	トレンチ一覧表(1)	18	第 7 表	調査区出土土器観察表(2)	57
第 2 表	トレンチ出土土器観察表(1)	20	第 8 表	調査区出土土器観察表(3)	58
第 3 表	トレンチ出土土器観察表(2)	21	第 9 表	調査区出土土器観察表(4)	59
第 4 表	トレンチ出土石器観察表	21	第10表	調査区出土石器観察表(1)	59
第 5 表	トレンチ一覧表(2)	22	第11表	調査区出土石器観察表(2)	60
第 6 表	調査区出土土器観察表(1)	56	第12表	調査区出土石器観察表(3)	61

図 版 目 次

図版 1	発掘作業風景他	65	図版 6	出土遺物(4)	70
図版 2	遺物出土状況他	66	図版 7	出土遺物(5)	71
図版 3	出土遺物(1)	67	図版 8	出土遺物(6)	72
図版 4	出土遺物(2)	68	図版 9	出土遺物(7)	73
図版 5	出土遺物(3)	69	図版10	出土遺物(8)	74

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県土木部は、熊毛郡上屋久町宮之浦において宮之浦港改修工事に伴う道路建設を計画し、工事区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課に照会した。この結果、工事区内が火ノ上山遺跡の範囲内であることから、県土木部と文化課の協議がもたれた。その結果、県土木部からの受託事業として緊急発掘調査を実施し、記録保存の処置を講ずることとなった。調査は県教育委員会が企画し、県立埋蔵文化財センターが調査責任者となって実施することとなった。

第2節 調査の組織

平成5年度

事業主体	鹿児島県土木部		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター所長	大久保忠昭	
	次長兼総務課長	水口 俊雄	
	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋	
調査担当者	文化財主事	繁昌 正幸	
	主査	倉元 良文	
調査事務担当者	主事	成尾 雅明	
		中村 和代	

平成7年度

事業主体	鹿児島県土木部		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター所長	内村 正弘	
	次長兼総務課長	河原 信義	
	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋	
調査担当者	文化財主事	倉元 良文	
	主査	下西 昌三	
調査事務担当者	主事	成尾 雅明	
		追立ひとみ	

なお、当遺跡の出土遺物については、鹿児島県考古学会長河口貞徳氏の指導助言を得た。また、発掘調査にあたっては上屋久町教育委員会及び地元の方々の協力を得た。

第3節 調査の経過

発掘調査は、平成5年6月7日から7月6日までと平成7年8月28日から9月22日までにそれぞれ実施された。以下、調査の経過については、年度毎の日誌抄をもってかえる。

【平成5年度調査】

- 平成5年6月7日 発掘機材搬入。諸準備。
- 8日 作業員への調査内容説明及び安全についての注意。雨のため午後作業中止。
- 9日 雨のため作業中止。
- 10日 1~8T設定。3~8T重機による表土除去。1~2T掘り下げ。3・4T遺構遺物なし。土層断面写真撮影、実測、埋め戻し。
- 11日 2T清掃、土層断面写真撮影、実測。5・6T掘り下げ。7・8T重機による掘り下げ、土層断面写真撮影。2・7・8T埋め戻し。
- 14日 9T設定。5・6・9T掘り下げ。
- 15日 10T設定。9・10T掘り下げ。
- 16日 9T掘り下げ、土層断面写真撮影、実測、埋め戻し。1T拡張、掘り下げ。
- 17日 10T土層断面実測。1T掘り下げ。
- 18日 1T掘り下げ。
- 21日 1T掘り下げ。11T設定、掘り下げ。
- 22日 1T掘り下げ。
- 23日 1T掘り下げ。
- 24日 5・6・11・12T清掃、写真撮影。
- 28日 5・11T掘り下げ。6T清掃、土層断面実測。
- 29日 6T埋め戻し。1・5T掘り下げ。11T土層断面写真撮影。
- 30日 5T清掃、土層断面写真撮影、実測。1・11T掘り下げ。
- 7月1日 1・11T土層断面写真撮影、実測。
- 2日 1・5・11T埋め戻し。後片付け。
- 5日 現地協議。
- 6日 平成5年度の調査終了。

【平成7年度調査】

- 平成7年8月29日 発掘機材搬入。環境整備。作業員への発掘調査の内容説明及び安全についての注意。12T~14T設定、掘り下げ開始。
- 30日 防護フェンス設置。12T~14T掘り下げ。
- 31日 12T~14T掘り下げ。15T設定、掘り下げ。遺跡遠景写真及び作業風景写真撮影。
- 9月1日 12T~15T掘り下げ。15Tから土器（上能野式）出土。12T~14T土層断面写真撮影。

- 4日 12T～14T掘り下げ。営林署宿跡地付近の表層を重機で除去。
- 5日 営林署宿跡地付近の表層を重機で除去及び残土処理。1T～3T清掃。
- 6日 10mグリッド設定。A-1・A-2・B-1・B-2区掘り下げ。12T～14T位置図作成、写真撮影。
- 7日 A-1・A-2・B-1・B-2区掘り下げ、清掃。写真撮影。遺跡範囲図作成。A・B-3・4区瓦礫除去、掘り下げ。
- 9日 A-5・B-5区瓦礫除去。A-3・A-4・B-3・B-4区掘り下げ。
- 11日 A-3・A-4・B-3・B-4区掘り下げ。
- 12日 A-2・B-2区掘り下げ、石組み検出。A-3・B-3区遺物出土状況写真撮影。
- 13日 A-3・A-4・B-3・B-4区掘り下げ。A-4・B-4区出土遺物平板実測、遺物取り上げ。石組み検出状況写真撮影。
- 14日 A-3・A-4・B-3・B-4区掘り下げ。
- 18日 A-4・B-3・B-4区出土遺物平板実測、遺物取り上げ。A・B-3・4区掘り下げ。
- 19日 A-5・B-5区掘り下げ。A-3・A-4・B-3・B-4区出土遺物平板実測、遺物取り上げ。
- 20日 A-3・A-4・A-5B-3・B-4・B-5区掘り下げ及び遺物出土状況写真撮影。
- 21日 A-3・A-4・B-3・B-4区掘り下げ、出土遺物平板実測。遺物取り上げ。A-4区遺物出土状況写真撮影。
- 25日 A-3・A-4・B-3・B-4区掘り下げ、出土遺物平板実測、遺物取り上げ。
- 26日 A-3・A-4・A-5B-3・B-4・B-5区掘り下げ、出土遺物平板実測、遺物取り上げ。B-4区遺物出土状況写真撮影。
- 27日 A-3・A-4・A-5B-3・B-4・B-5区掘り下げ、出土遺物平板実測、遺物取り上げ。B-3・B-4・B-5区南側断面写真撮影及び実測。
- 28日 後片付け。発掘機材搬出。調査終了。

第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境

第1節 遺跡の位置

屋久島は、佐多岬の南方約70kmの東シナ海に浮かぶ東西約28km、南北約24km、周囲約105km、面積約500km²のほぼ円形の島である。面積では、佐渡・奄美大島・淡路島・天草下島に次ぐ島である。地形は、海岸線から急峻な山々へ連なり平野部は少なく、亜熱帯から亜高山帯までの植物垂直分布が顕著である。中央部には宮之浦岳をはじめとし、永田岳・黒味岳など1500m以上の山が30以上も続き、霧島屋久国立公園となっている。屋久島のまわりには黒潮が流れ、この影響で平地では平均気温が21℃と温暖な気候であるが、高山部では冬期には氷点下10℃以下にもなる気候変化に富む島である。また、海の水分を多量に含んだ空気は、山にそって上昇し雨雲となり、平地でも年間4000mm近くの雨量を観測する。従って、河川の流量も多く、高い山々より一気に海岸へと向かう瀑布も数多く存在する。1993年12月に世界遺産委員会で、世界的に貴重な自然遺産として日本で最初に世界遺産リストに登録された。

火ノ上山遺跡の所在する上屋久町は、屋久島の北半分と口永良部島からなり、南は屋久町に接し、他は海に面している。

史料に見る屋久島は、「日本書記」推古天皇24年3月条、「統日本紀」文武天皇3年秋7月辛未条に「掖玖」の記載がある。中世の前半においては屋久島は島津氏の支配下に置かれるが、15世紀に入ると種子島氏の支配を受けることとなり近世にいたる。そして、明治22年宮之浦・楠川・小瀬田・吉田・一湊・志戸子・永田・口永良部の8ヶ村が合併し上屋久村に、昭和33年に上屋久町となった。

上屋久町の遺跡は、鹿児島県市町別遺跡地名表によると平成7年3月現在66箇所の遺跡が知られている。特に、一湊松山遺跡は、昭和26年以来数回の発掘調査が行なわれ、縄文時代後期の松山式土器と一湊式土器の模式遺跡である。一湊松山遺跡をはじめとし、縄文時代の遺跡は34箇所、弥生時代の遺跡は本遺跡を含め19箇所が知られている。

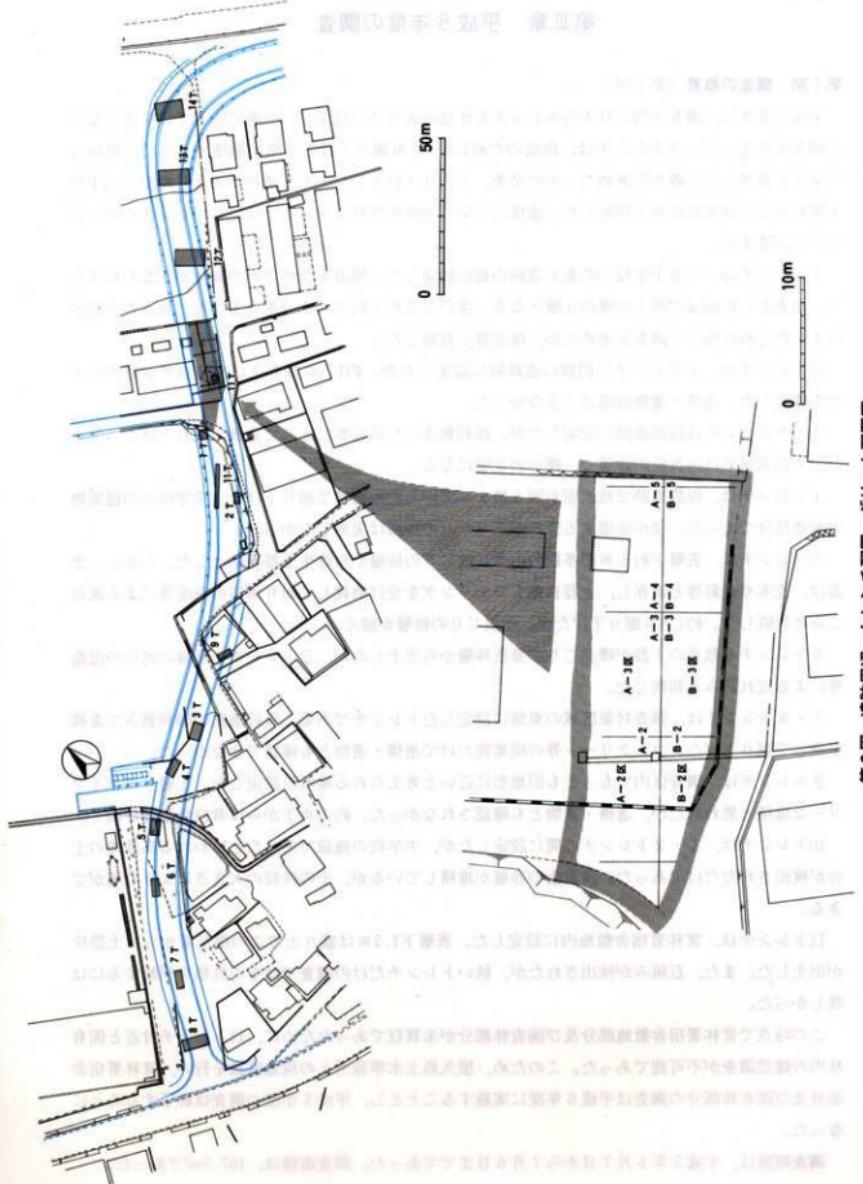
平成3年には岡遺跡の調査が行なわれ、15~16世紀の小舟の係留地と考えられる溝状遺構が検出され、青磁・白磁等が出土した。平成6年には永田の叶遺跡の調査が実施されている。

本遺跡は宮之浦川の右岸にあり、現海岸線まで数十メートルという砂丘の後背地にある。市町別遺跡地名表の宮之浦遺跡(82-14)がこれにあたる。昭和50年代の宮浦中学校体育館建築や校庭の造成の折りには土器が多量に出土したことである。したがって本遺跡の主体部はすでに破壊された可能性が強い。また、昭和61年に鹿児島大学法文学部考古学研究室と上屋久町教育委員会による町内の遺跡分布調査が行なわれ、本遺跡で採集されたという土器が紹介されている。

参考文献

「一湊松山遺跡」	上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書	1981	上屋久町教育委員会
「日本地名大辞典」		1983	角川書店
「上屋久町の埋蔵文化財」	上屋久町埋蔵文化財調査報告書 第2集	1989	上屋久町教育委員会
「岡遺跡」	上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集	1992	上屋久町教育委員会

査間の要素と地平・拿豆塚



第2図 道路周辺・トレーンチ配置・グリッド配置図

第Ⅲ章 平成5年度の調査

第1節 調査の概要（第2図）

平成5年度は、調査区内に11本のトレンチを任意の大きさで設定し、必要に応じては拡張しながら調査を行なった。各トレンチは、砂地のため1.5～2m掘り下げるとき壁が崩壊するので、概ねこの深さを基準とし、調査を進めた。その結果、5・6・11トレンチから遺物が出土したが、いずれも攪乱もしくは流れ込みと判断した。遺構についても検出されなかった。次に各トレンチの状況について記述する。

1トレンチは、宮浦中学校への進入道路の脇に設定した。現道を含め3回の嵩上げが行なわれていた。地表から約80cmで砂と小礫の互層となる。深いところで約2mまで掘り下げた。数点の土器が出土したため拡張して調査を進めたが、攪乱層と判断した。

2トレンチは、1トレンチと同様に道路脇に設定したが、約1.5m掘り下げた時点で水道のパイプを確認した。遺構・遺物は確認できなかった。

3～8トレンチは仮設道路に設定したが、砂利敷きのため必要に応じて重機で掘り下げた。3トレンチの表層下は白黄色の砂層で、礫との互層になる。

4トレンチは、仮設道路で地表面が固く締まっていたため重機で掘り下げた。中学校の旧建築物の基礎部分であった。壁が崩壊する恐れがあったため断面は実測しなかった。

5トレンチは、表層下約1mで多数の円礫に混じりの砂層から弥生土器が出土した。しかし、土器は、流木や金釘等と混在し、土器自体もローリングを受け磨耗しており河川の氾濫等による流れ込みと判断した。約1.8m掘り下げたが、礫混じりの砂層が続く。

6トレンチも数点の土器が礫混じりの黄色砂層から出土したが、5トレンチと同様に河川の氾濫等による流れ込みと判断した。

7・8トレンチは、調査対象区域の東側に設定したトレンチである。仮設道路の砂利敷きで重機を使って掘り下げた。コンクリート等の廃棄物だけで遺構・遺物とも確認できなかった。

9トレンチは、調査区内でもっとも旧地形に近いと考えられる場所に設定した。土層もブライマーイーな堆積と思われたが、遺構・遺物とも確認されなかった。約1m下からは黄白色砂層が続く。

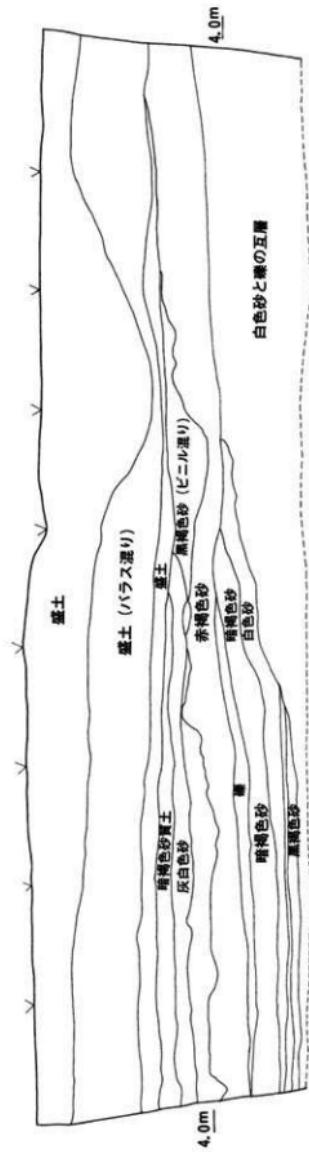
10トレンチは、1・2トレンチの間に設定したが、中学校の施設であったと思われる高鉄棒の土台が検出されただけであった。浅黄色の砂層が堆積しているが、その砂粒の大きさにより分層ができる。

11トレンチは、営林署宿舎敷地内に設定した。表層下1.5mは盛り土でこの攪乱層からは土器片が出土した。また、石組みが検出されたが、狭いトレンチだけの調査ではその性格を判断するには難しかった。

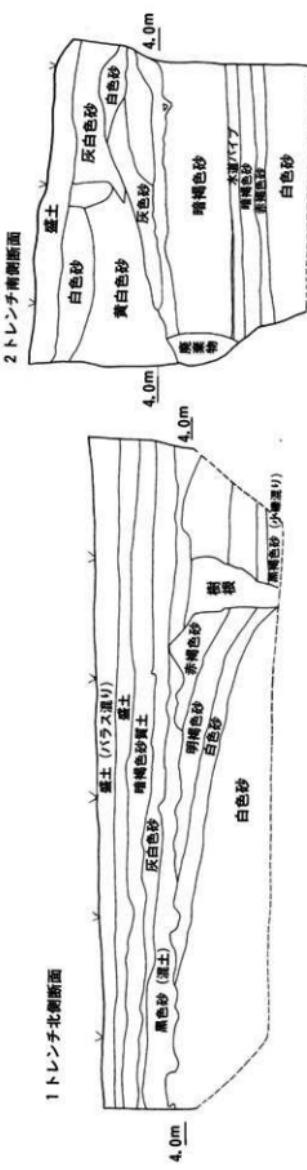
この時点では営林署宿舎敷地部分及び国有林部分が未買収であったために、11トレンチ付近と国有林内の確認調査が不可能であった。このため、屋久島土木事務所との現地協議を行い、営林署宿舎部分及び国有林部分の調査は平成6年度に実施することとし、平成5年度の調査は終了することになった。

調査期間は、平成5年6月7日から7月6日までであった。調査面積は、167.5m²であった。

1 レンチ西側断面



1 レンチ北側断面



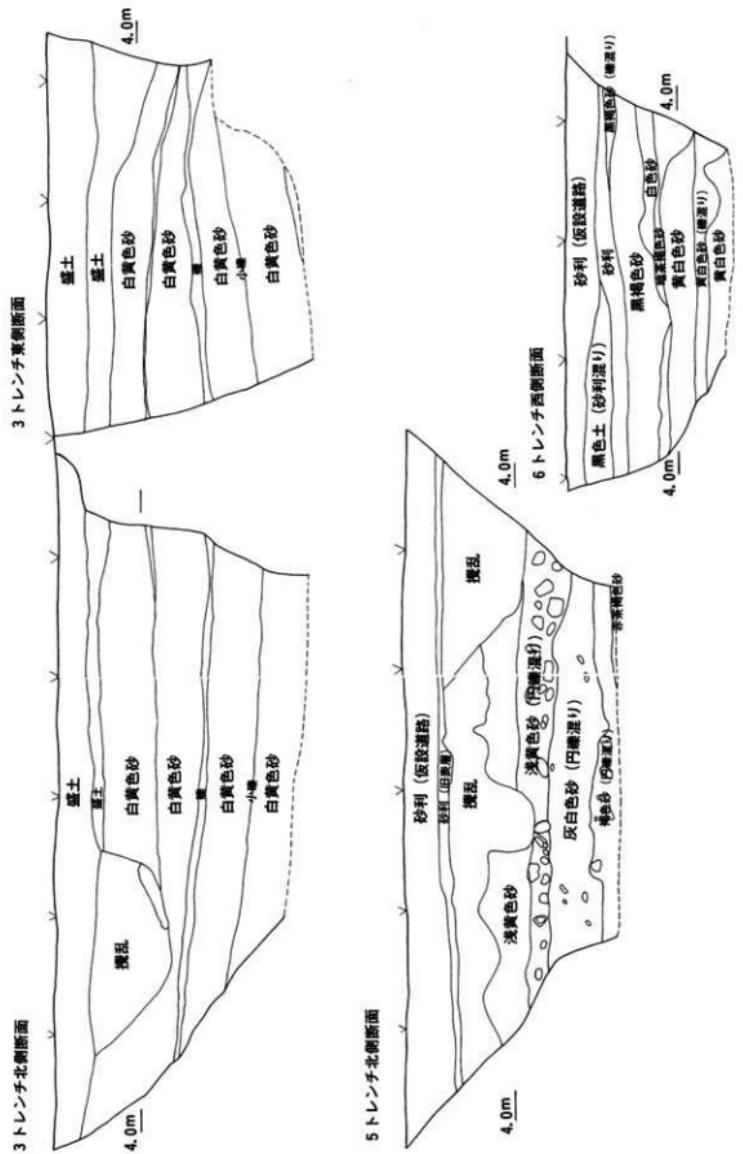
- 13 -

第3図 1 T・2 T 土層断面図

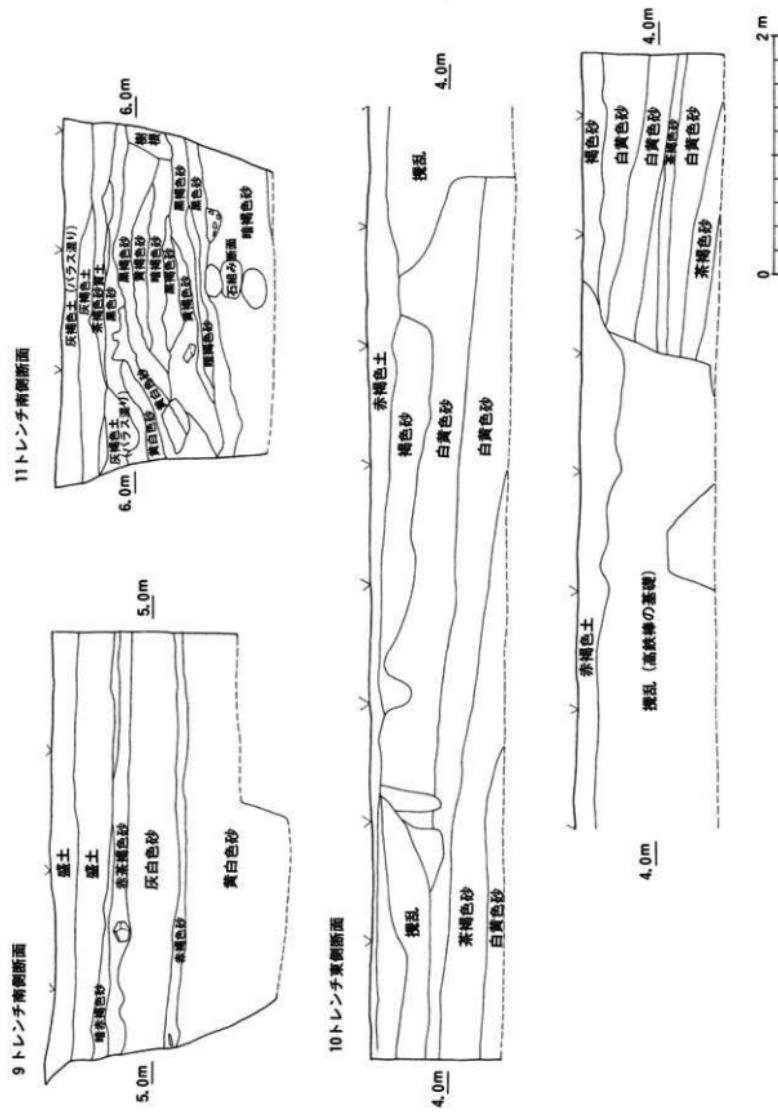
0
2 m

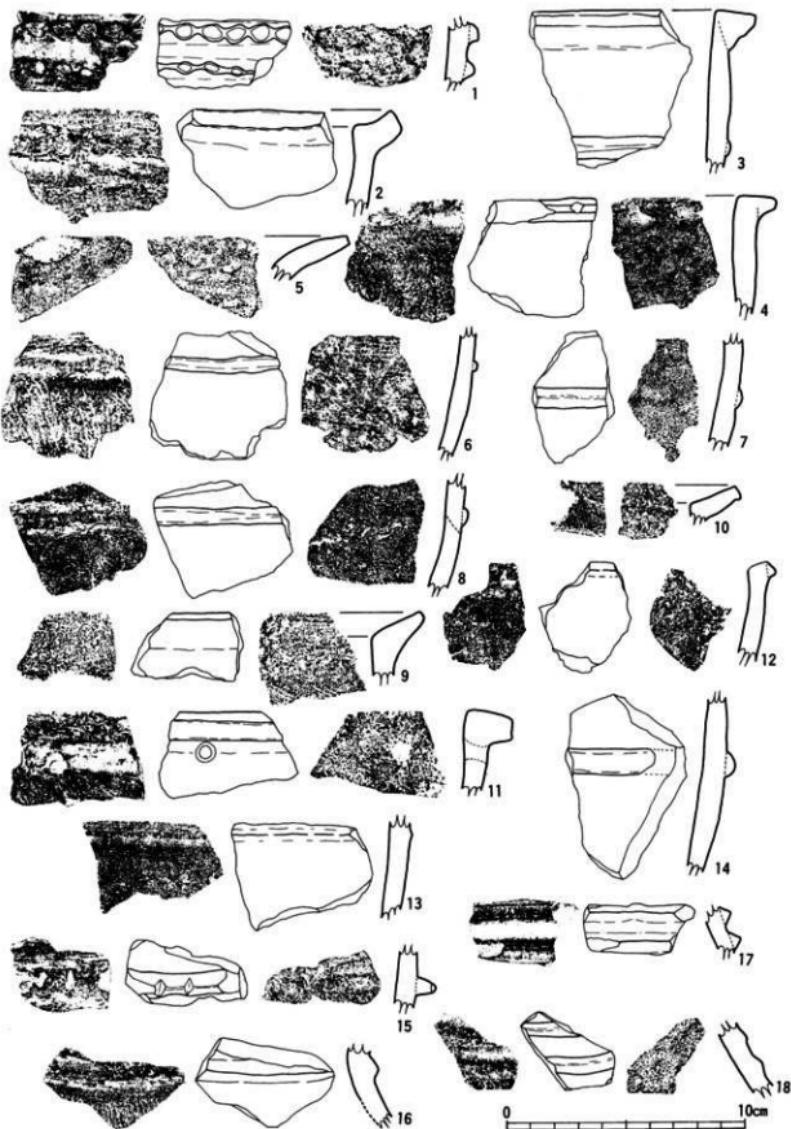
2 m

第4図 3T・5T・6T土層断面図

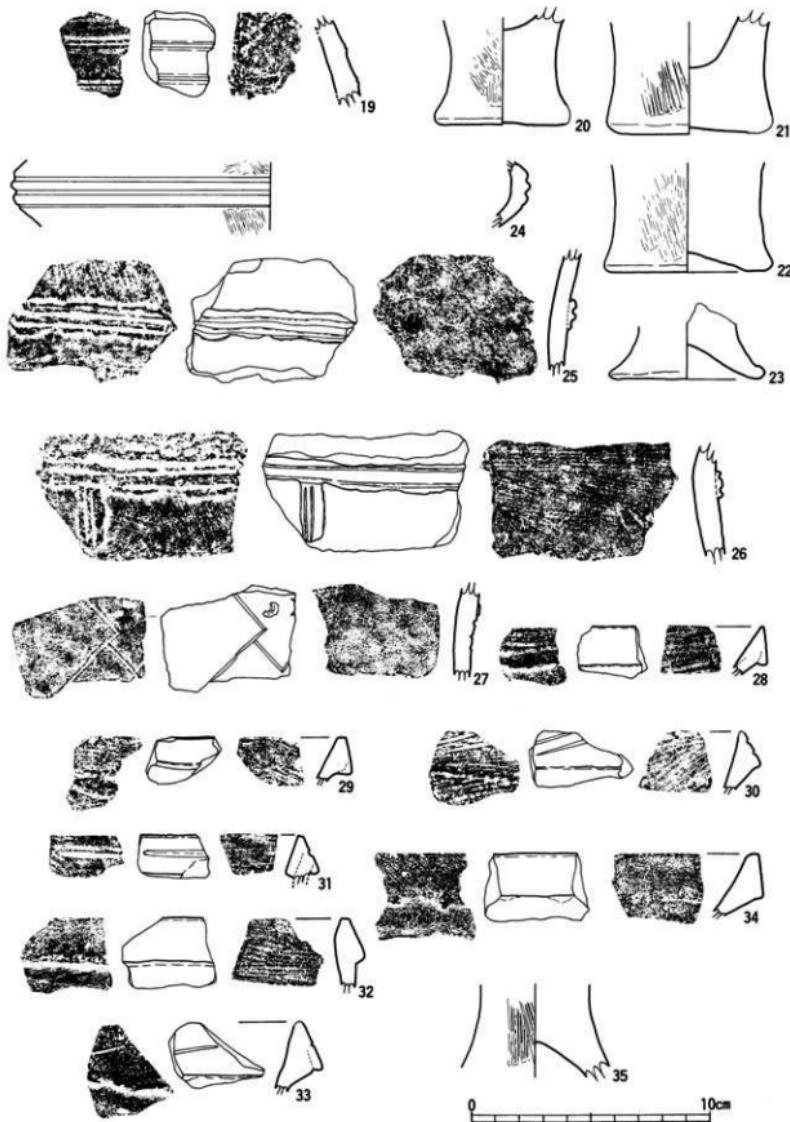


第5図 9T・10T・11T土層断面図

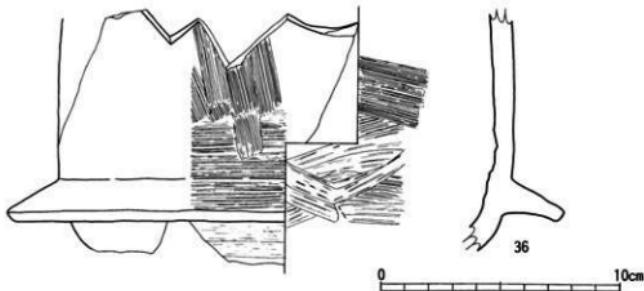




第6図 トレンチ出土遺物(1)



第7図 トレンチ出土遺物(2)



第8図 トレンチ出土遺物(3)

第1表 トレンチ一覧表(1)

トレンチ番号	調査面積m ² (m)	構造の有無	遺物の有無	備 考
1	7.5 (2.5× 3.0)	無	無	茶褐色砂層から土器出土。拡張して調査したが擾乱。
2	6.6 (2.0× 3.3)	無	無	表層下は浅黄色砂層。
3	19.8 (3.6× 5.5)	無	無	仮設道路砂利敷きの下、約2m確認。
4	18.0 (3.0× 6.0)	無	無	宮浦中学校旧校舎基礎部分。
5	19.25 (3.5× 5.5)	無	無	多量の円錐の中に土器・流木・かな釘。川の氾濫等による流れ込み。
6	13.75 (2.5× 5.5)	無	無	5トレンチと同じ。
7	21.0 (3.5× 6.0)	無	無	約2m砂層を掘り下げ。
8	31.68 (3.6× 8.8)	無	無	約2m砂層掘り下げ。
9	11.27 (2.3× 4.9)	無	無	約2m砂層掘り下げ。
10	14.5 (1.0× 14.5)	無	無	宮浦中学校旧高鉄棒基礎以外は砂層。
11	4.14 (1.8× 2.3)	有	無	石組み。地表下約1.5m時代・性格等は不明。

第2節 遺物 (第6~10図)

出土した遺物はすべて擾乱及び表層からの出土である。1は、2条の突帯に刻みを施したものである。焼成もよく，在地の土器のものとは違う。

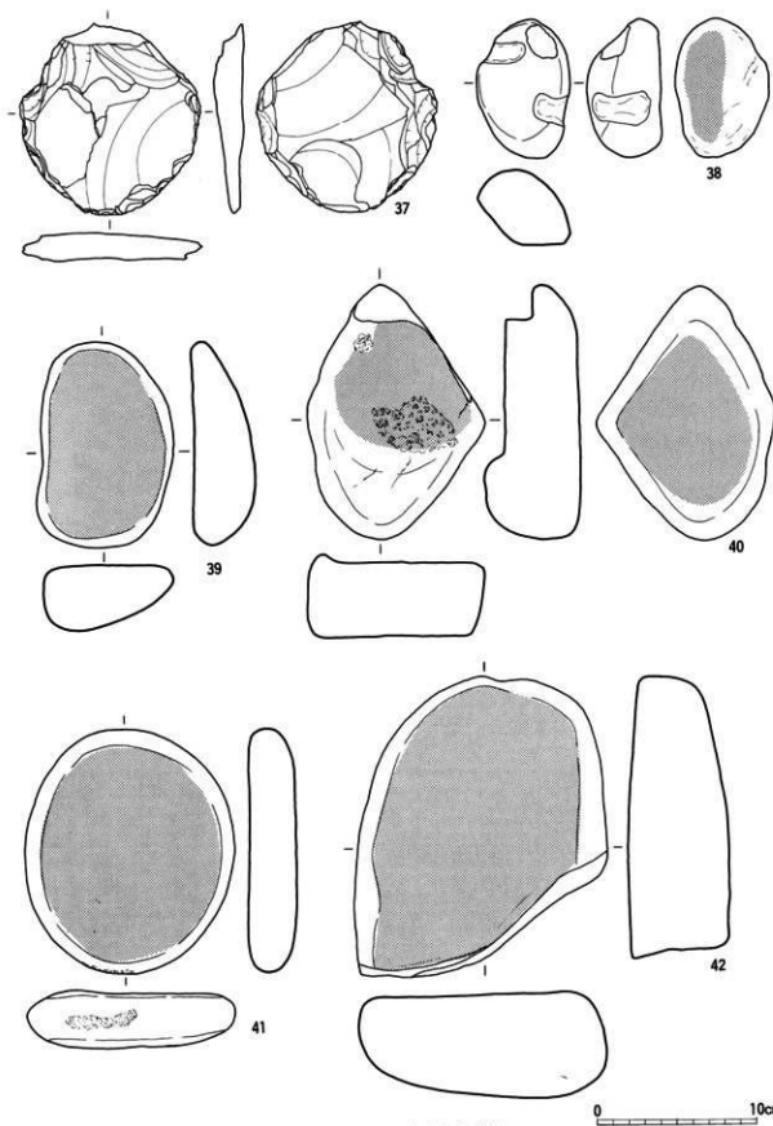
2は、口縁部を逆L字状にし端部を平坦につくってある。口縁屈曲部が若干上向きである。3・4は逆L字の口縁端部がすぼまる。3は口唇部と胴部の突帯に、4は口唇部に刻みがあつただろうが、ローリングを受け明確ではない。5の口唇部は、明確な面取りがみられる。6・7・8は、突帯部分である。3~8の胎土は小窪を含み粗く、調整も粗い。

9~11は、口縁部である。9・10は、口縁屈曲部が上向く。11は、口縁下部に穿孔を施してある。12~15は、壺形土器の突帯部分である。12の突帯に刻みの有無は不明、15の突帯には明確な刻みがはいる。13の突帯は、わずかな隆起で2状以上つく可能性もある。16~19は、壺形土器の突帯部分である。13・16・17・19の胎土は、密で焼成もよい。20~22は底部で、胎土・焼成とも類似している。24は、長頸壺と思われる土器の胴部である。胴部復元径は、21.6cmである。

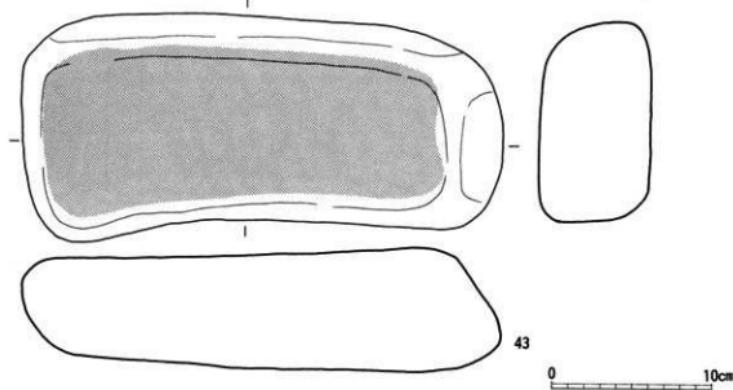
25・26は、平たい粘土紐を貼り付け、その上に2状の沈線を施すものである。

27は沈線を施し、小さい瘤状の突起をもつ土器片である。

28~33は、すべて1トレンチの表層出土の土器である。口縁部の断面が三角形で、肥厚帯に沈線を施すものと無文のものがある。調整はハケを基本とする。



第9図 トレンチ出土遺物(4)



第10図 トレンチ出土遺物(5)

36は、羽釜である。鍔部分より上部が長く、菱形と円状と思われる透かしが特徴である。県内の羽釜出土例としては、鹿児島市加栗山遺跡・鹿児島市鹿児島城跡・横川町横川城跡・姶良町南宮島遺跡・東串良町下伊倉城跡・上屋久町岡遺跡に類例がある。

37~43は、すべて表層出土である。37は、基部の欠損した打製石斧である。38・39は磨石で、39は2条の溝状のくぼみがある。40~42は石皿、43は砥石である。

1は弥生時代前期、2~24は弥生時代中期に比定できると思われる。25・26は、鳥ノ峯遺跡出土の土器に類似しているようにも思われる。28~32は、口縁部が肥厚する上能野式土器である。33は脚部であるが、上能野式土器である。27は沈線で文様を施すが、上能野式土器とは若干ニュアンスが違うようと思われる。

第2表 トレンチ出土土器観察表(1)

標団 番号	遺物 番号	出土区 域	層	胎 土	焼成	色 調	外 面	内 面	備 考
第 6 図	1	5 T	表	長石 石英	良	褐色	ハケ	風化	
	2	5 T	表	長石 石英 金雲母 砂粒多い	不良	黄褐色	ハケ	ハケ	器面調整は粗い
	3	5 T	表	長石 石英 金雲母 砂粒多し	不良	黄褐色	ハケ	ハケ	器面調整は粗い 突堤先端は摩滅
	4	5 T	表	長石 石英 金雲母 砂粒	不良	暗灰黄色	ハケ	ハケ	突堤の先端は摩滅
	5	5 T	表	長石 石英 金雲母 砂粒	不良	褐色	ナデ	ナデ	
	6	5 T	表	長石 石英 金雲母 砂粒	不良	褐色	ハケ	ハケ	突堤の先端は摩滅
	7	5 T	表	長石 石英 金雲母 砂粒	不良	褐色	ハケ	ナデ	突堤の先端は摩滅
	8	11 T	表	長石 石英 金雲母 砂粒	不良	暗灰褐色	ナデ	ナデ	内外とも多少風化
	9	5 T	表	長石 石英 金雲母 砂粒	不良	黄褐色	ナデ	ハケ	
	10	5 T	表	長石 石英 金雲母 砂粒	不良	褐色	ナデ	ナデ	

第3表 トレンチ出土土器観察表(2)

擇区番号	遺物番号	出土区	層	胎 土	焼成	色 調	外 面	内 面	備 考
第6区	11	11 T	表	長石 石英 金雲母	不良	黄褐色	ナデ	風化	穿孔
	12	5 T	表	長石 石英 金雲母	不良	褐色	ナデ	ナデ	突蒂先端は摩滅
	13	11 T	表	長石 石英	良	黄褐色	ハケ	風化	
	14	11 T	表	長石 石英 金雲母	不良	明赤褐色	風化	ナデ	
	15	5 T	表	長石 石英 金雲母 砂粒	普通	褐色	ナデ	ナデ	
	16	11 T	表	長石 石英	良	明褐色	ハケ	ナデ	複数の突蒂
	17	5 T	表	長石 石英	良	浅黃褐色	ハケ	不明	
	18	5 T	表	長石 石英	普通	黄褐色	風化	風化	
第7区	19	5 T	表	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ナデ	
	20	5 T	表	長石 石英 金雲母 砂粒	不良	黄褐色	ナデ		上底気味
	21	5 T	表	長石 石英 金雲母 砂粒	普通	黄褐色	ハケ		上底気味
	22	5 T	表	長石 石英 金雲母	不良	浅黃褐色	ナデ		上底
	23	11 T	表	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ナデ		
	24	11 T	表	長石 石英	良	褐色	ナデ	ナデ	長頸壺
	25	5 T	表	長石 石英 金雲母	良	明赤褐色	ハケ	ナデ	
	26	11 T	表	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	27	11 T	表	長石 石英 金雲母	良	褐色	ハケ	ハケ	
	28	1 T 拡	表	長石 石英 金雲母	良	明赤褐色	ハケ	ハケ	
	29	1 T 拡	表	長石 石英 金雲母	普通	明褐色	ハケ	ハケ	
	30	1 T 拡	表	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ハケ	口唇部欠損
第8区	31	1 T	表	長石 石英 金雲母	普通	褐色	ハケ	ハケ	巾広い沈線
	32	1 T 拡	表	長石 石英 金雲母	普通	赤褐色	ハケ	ハケ	
	33	1 T 拡	表	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ハケ	風化	
	34	1 T 拡	表	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ハケ	
	35	1 T 拡	表	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ハケ		
	36	11 T	表	瓦器質 金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	羽蓋

第4表 トレンチ出土石器観察表

擇区番号	番号	出土区	層	器 種	石材	長さm	幅cm	厚さcm	重量kg	観 察 所 見
第9区	37	6 T	表	石斧	粘板岩	11.9	11.3	1.7	0.26	破損
	38	6 T	表	磨石	砂岩	8.8	5.9	4.6	0.23	溝2本
	39	11 T	表	磨石	砂岩	12.9	8.3	4.1	0.61	
	40	5 T	表	石皿	砂岩	16.0	11.2	6.3	1.2	小型
	41	5 T	表	磨石	砂岩	15.2	13.2	3.0	1.6	
	42	11 T	表	石皿	砂岩	17.8	15.7	6.7	2.79	破損
第10区	43	5 T	表	砾石	砂岩	14.1	30.1	7.7	5.53	

第IV章 平成7年度の調査

第1節 調査の概要（第2・11図）

営林署宿舎部分及び国有林内の調査は手続き上の問題で協議の結果、平成6年度に実施する計画であった。しかし、国有林の指定解除等の手続きが再び平成6年度内に終了せず、平成7年度まで延期することとなった。

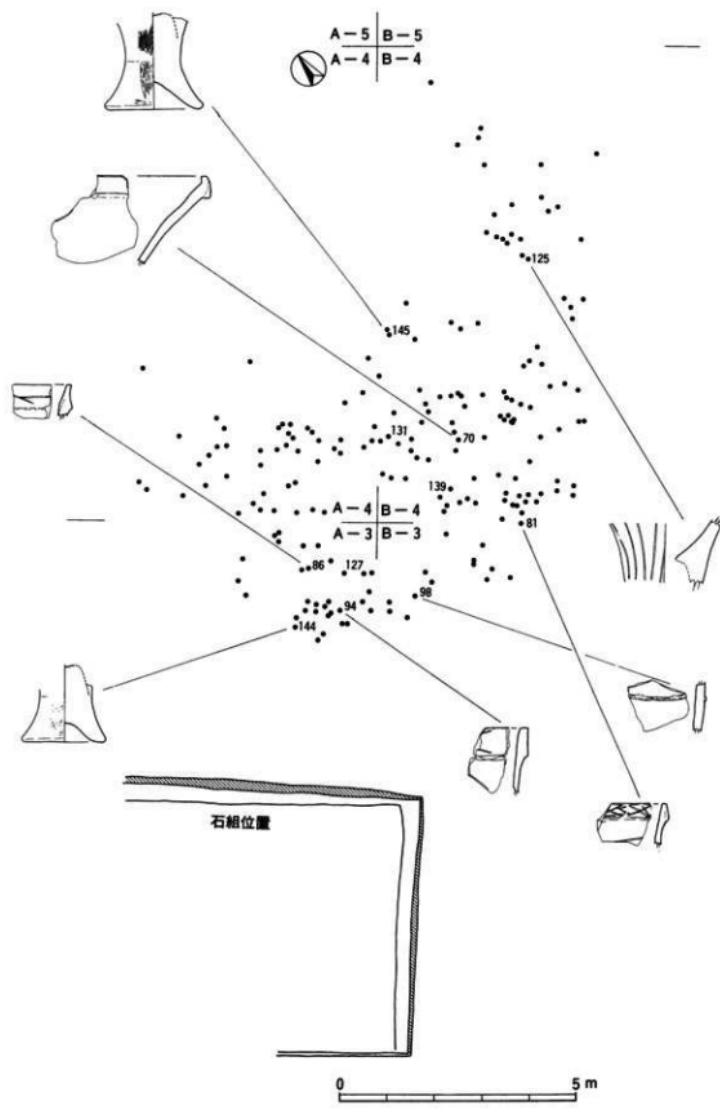
平成7年度は、国有林内の樹木伐採及び営林署宿舎一部立退後に調査を開始した。まず、現砂丘の海側の傾斜地に12~14トレンチを任意の大きさで設定し、人力で掘り下げた。いずれのトレンチも浅黄色砂と灰白色砂の互層で遺構・遺物とも検出されなかった。土層断面も写真撮影のみで実測はしなかった。15トレンチは、営林署宿舎部分の道路側に設定した。その結果、地表面から約30cmの深さに上能野式土器が出土した。平成7年度と平成5年度の確認調査結果をもとに営林署宿舎部分を全面発掘調査することとした。

調査は、調査区の南北の境界線から約50cm控えて、表層を重機で慎重に掘り下げ、排土はトラックで調査区外へ持ち出した。重機による表層の剥ぎ取り後、道路計画図面のセンターNo11とNo12を基準に10mグリッド枠を北から南へA・B区、東から西へ1~5区と設定した。人力による掘り下げは、1・2区から行なった。表層下から土器が多く出土したが、掘り進めるに従って陶器類やビン類も出土し搅乱と判断した。包含層と同じ砂で盛り土してあり、搅乱であるかどうかの判断に時間を要した。平成5年度の確認調査で一部検出した石組みは、短辺が東西方向に5.5mで長辺は南北へ走り調査区の北側へと続いていた。検出を進めるうちに石組み内より軟式の野球ボールやビニールひもも確認されたために最近の構築物と判断し写真撮影と位置図を作成し実測は行なわなかった。これにより包含層が残存する範囲は、A・B-3区の中程より西側に限定されることになった。遺物はⅢ層を中心にⅡ層からⅣ層にかけて出土した。表層からは弥生時代の土器片も出土したが、包含層から出土した土器はそのほとんどが上能野式土器であった。石器は、磨石・敲石・石皿類が多く出土した。Ⅳ層上面で遺構検出を行い、一部黒色化している箇所があり調査した結果すべて樹根であった。また、A-4区の大部分は営林署宿舎敷地の造成時に搅乱を受けていると思われ、搅乱を受けても砂層のため、その判断には手間取った。

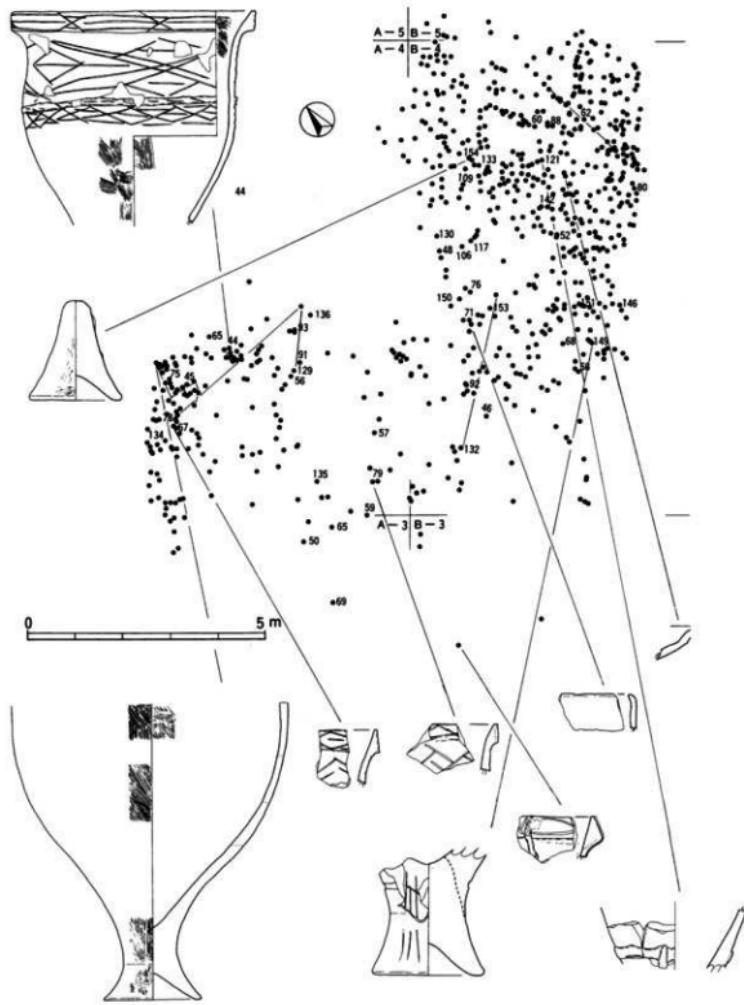
調査期間は平成7年8月29日から9月28日まで、調査面積は445m²であった。

第5表 トレンチ一覧表(2)

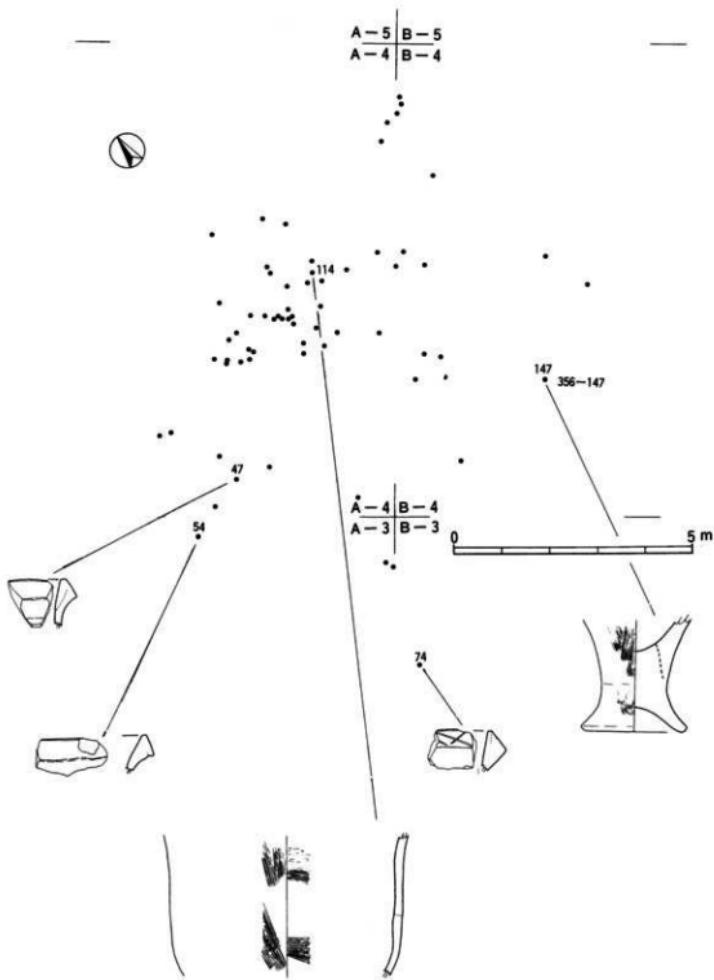
トレンチ番号	調査面積m ² (m)	遺構の有無	遺物の有無	備考
12	49.68 (9.2×5.4)	無	無	現海岸線から約30m
13	50 (10×5)	無	無	現海岸線から約50m
14	48.6 (9 ×5.4)	無	無	現海岸線から約75m
15	8 (2 ×4)	有	無	現海岸線から約100m 上能野式土器出土



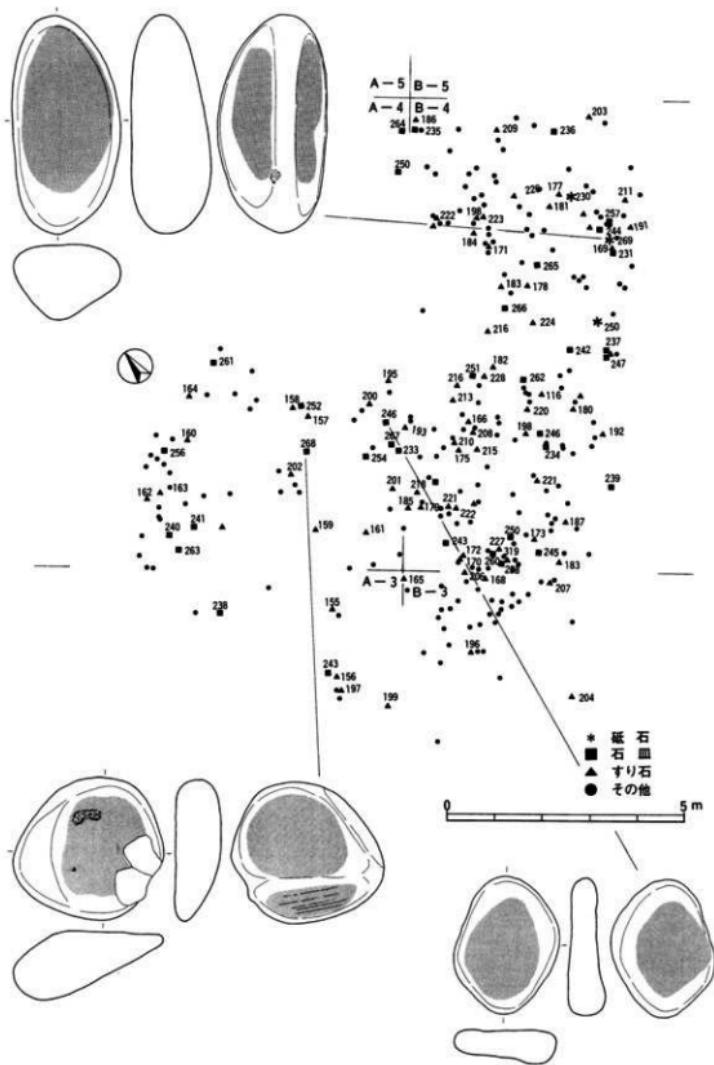
第11図 II層遺物（土器）出土状況



第12図 Ⅲ層遺物（土器）出土状況



第13図 IV層遺物（土器）出土状況



第14図 II～IV層遺物（石器）出土状況

第2節 層序

調査区内は擾乱・盛土部分があったり、砂丘地であるためか砂層が連続しなかったりするが、基本的には次のとおりである。包含層は、Ⅲ層を中心にⅡ層下面からⅣ層上面にかけてである。



第15図 基本土層図

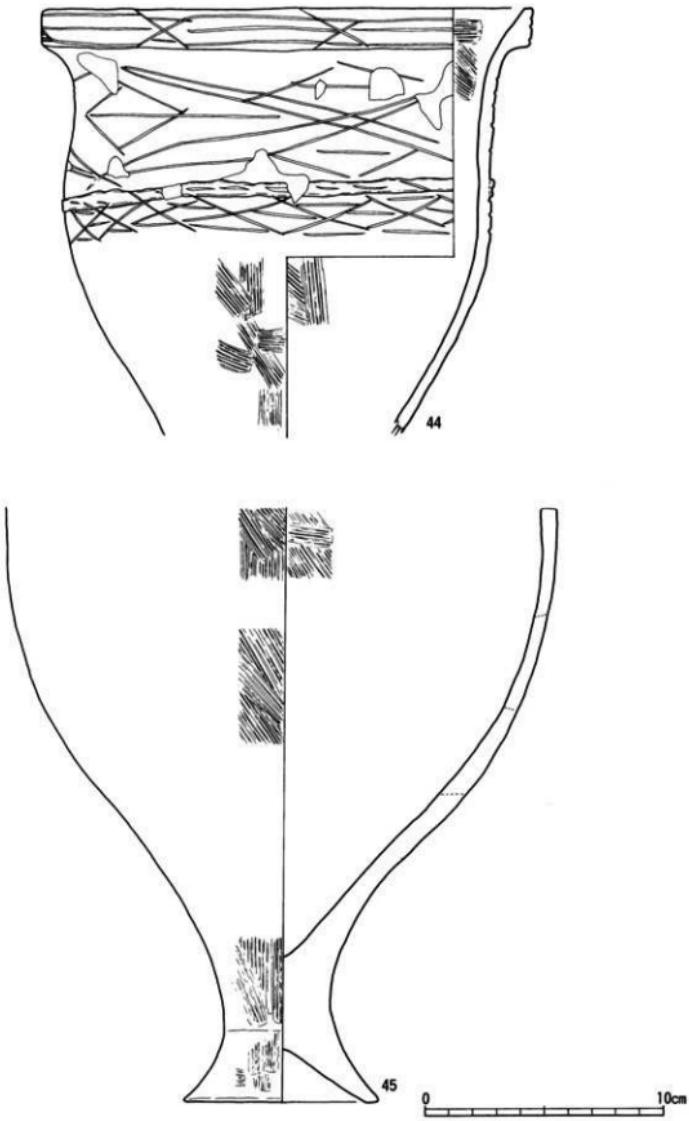
第3節 遺物

【土器】(第16~25図)

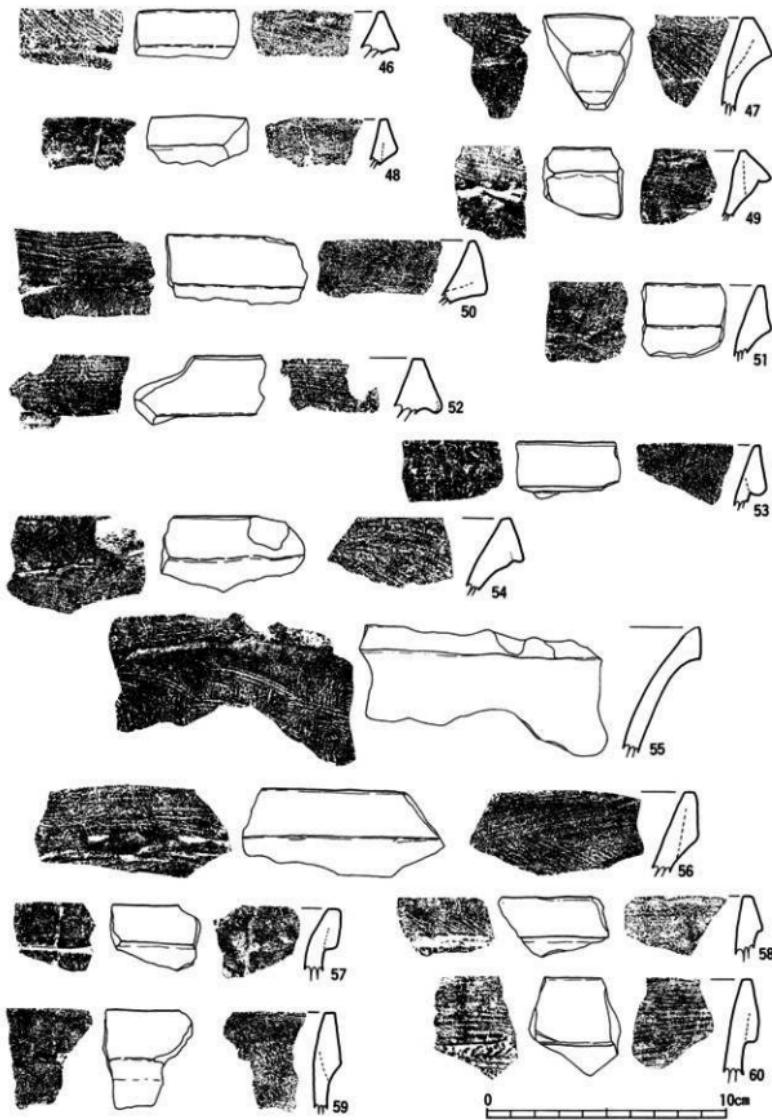
44・45は、今回の調査で出土した土器の中で完形に近いものである。44は、最大径を口縁部に持ち20.4cmを計る。断面三角形に肥厚した口縁部は外反し、口縁端部は平坦に仕上げている。頸部は、少し湾曲しながら胴部へ続く。器壁は5~6mmと薄い。胴中央部には貼りつけ突帯をもつ。文様は肥厚した口縁部から胴中央部の突帯の下まで沈線を施す。調整は内外ともハケ目である。45の上部三分の一は欠損している。釣り鐘状の胴部に小さめの脚がつく。胴部の最大径は23cm、底径は8cmである。器壁は5~8mmである。調整はハケ目による。上部三分の一は接合面で剥離しているが、その面を再度利用した調整痕らしいものがある。

46~72は、無文の口縁部である。口縁部が外反気味か直行するもの(46~64)、外反し口縁端部が内側を向くもの(65~70)がある。口縁部の断面については三角形になるもの、間延びした三角形になるもの、四角形に近くなるものがある。また、口縁端部は平坦に仕上げるが、67については丸くおさめている。70は、肥厚帯の断面が四角形となり口縁部は外反する。71は、器壁が4mmと薄く、口縁部に肥厚帯をもたず直行し端部が内湾する。72は、土師質の土器で、器形的には須恵器の広口の壺の口縁部か蓋の可能性があるが、小片のため断定はできない。

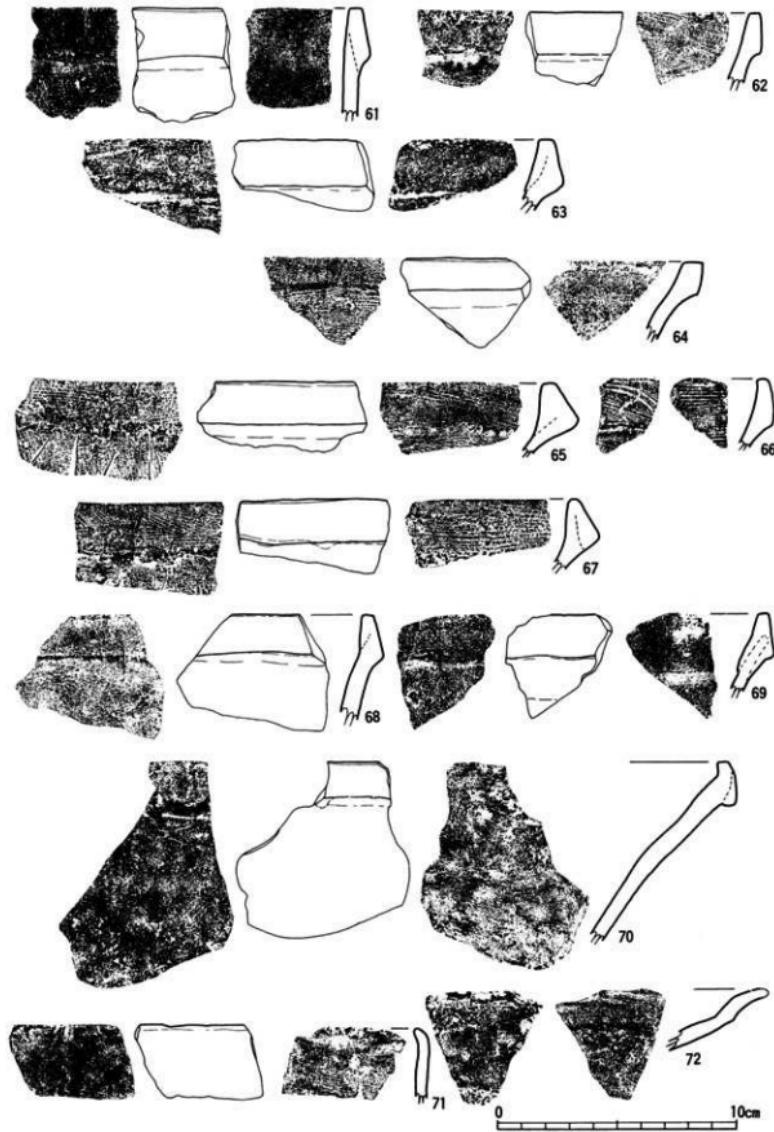
73~97は、沈線で文様を施した口縁部である。ほとんどの口縁部は、外反気味に直行する。口縁部の断面も無文の口縁部と同じように三角形・間延びした三角形・四角形に近いものがある。また、口縁端部は、平坦に仕上げるものがほとんどである。73は、口縁部外側に綫の粘土紐を貼り付け、平坦に押さえ付けた後に沈線を施している。また、口縁部肥厚帯にも交叉する沈線がはいる。



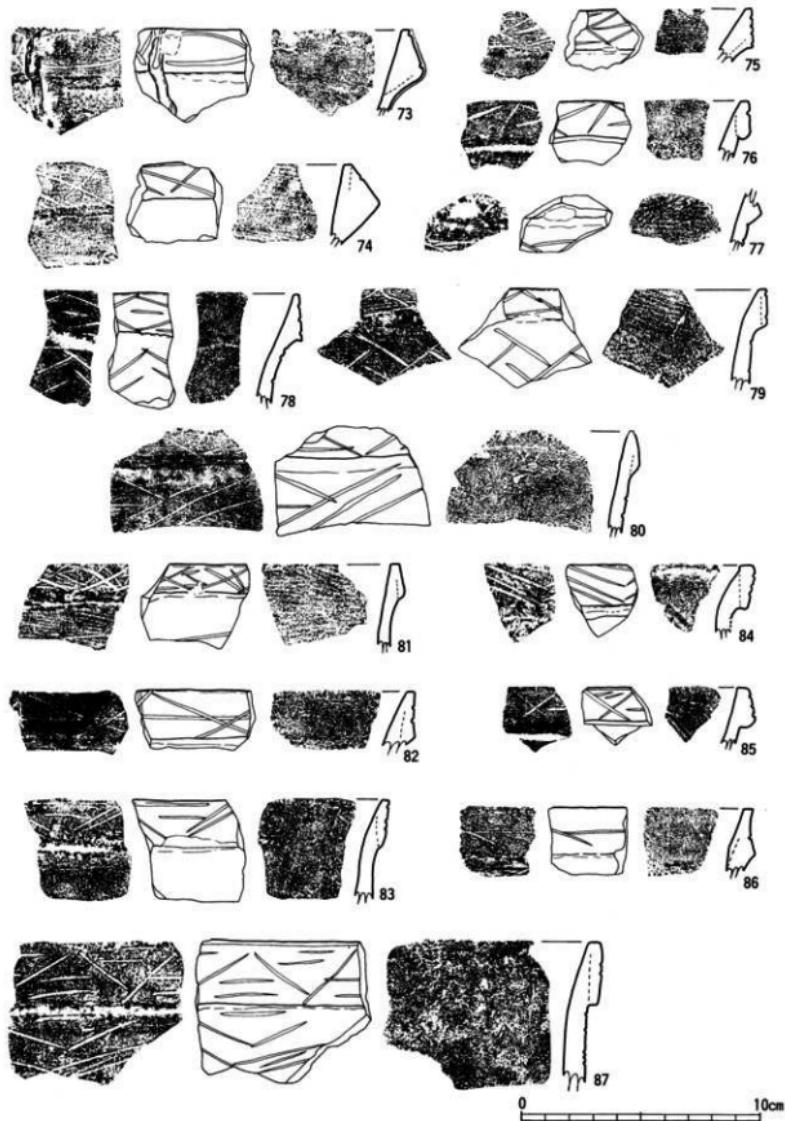
第16図 調査区出土遺物(1)



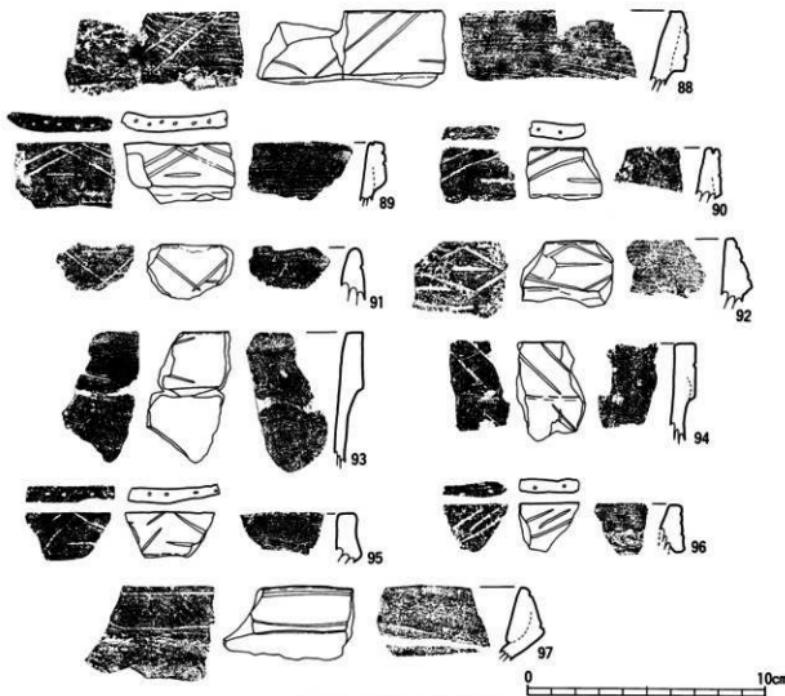
第17図 調査区出土遺物(2)



第18図 調査区出土遺物(3)



第19図 調査区出土遺物(4)



第20図 調査区出土遺物(5)

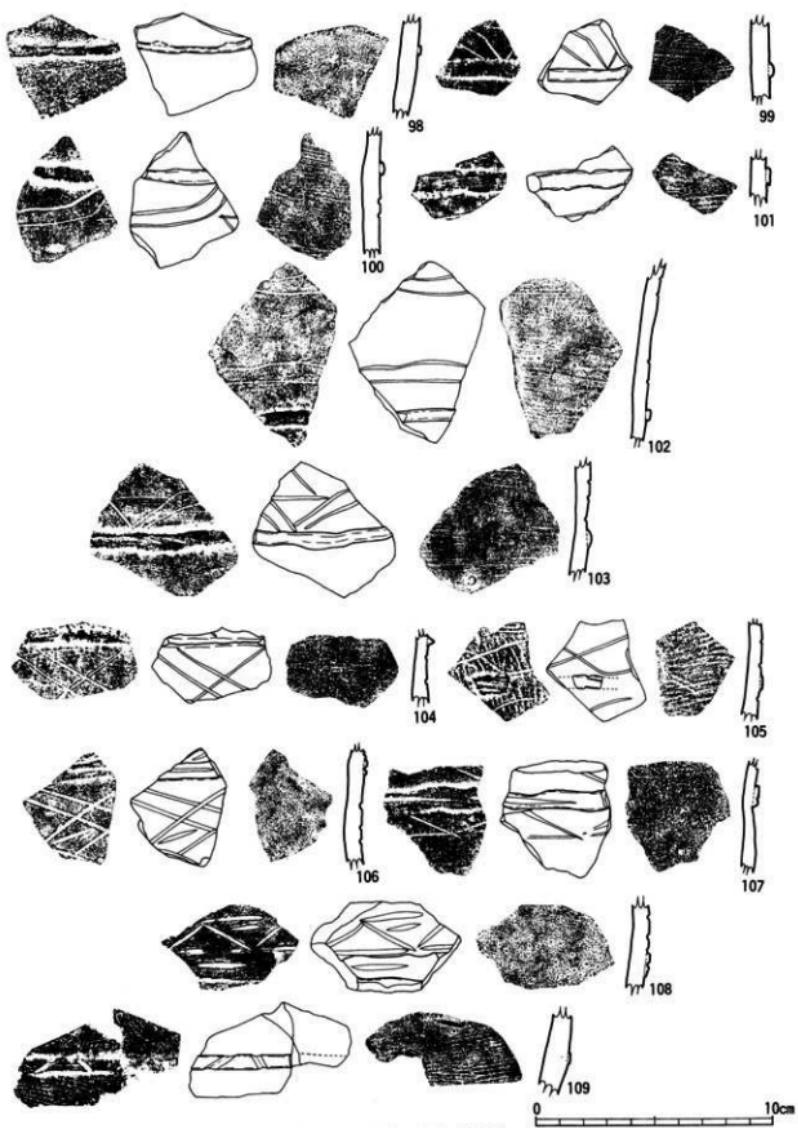
89・90・95・96は平坦な口唇部に刺突を施す。文様は基本的に直線的な沈線を施すが、73・97のように曲線的な沈線も見受けられる。

98~113は、突帶部分である。突帶上に沈線を施さないもの（98~104）、突帶上に横位の沈線を施すもの（105~109）、突帶上に斜位の沈線を施すもの（108~113）がある。沈線を施すものは突帶を貼り付けたあと、平坦に押さえ付けている。104は、断面が細い三角形となる。

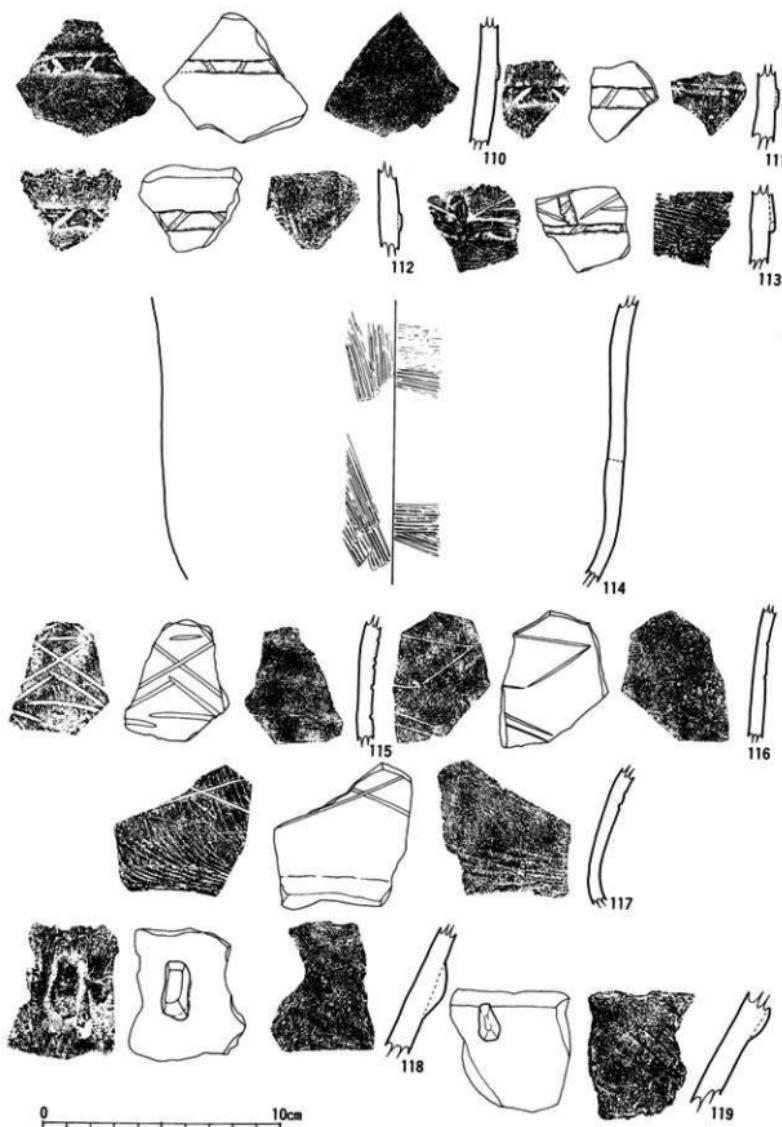
114は、無文の胴部片で、胴部が張らずに頸部へと続く。最大径が、20.2cmである。外側の壁面には炭化物が多く付着する。

115~117は、沈線をもつ胴部破片である。118~121は、胴下部に瘤状の突起をもつものである。119と120は、同一固体と思われる。121は胴下部に一条の突帶を横位にめぐらせ、その上から縦の突帶を脚部方向に貼り付けているが、その終点は不明である。

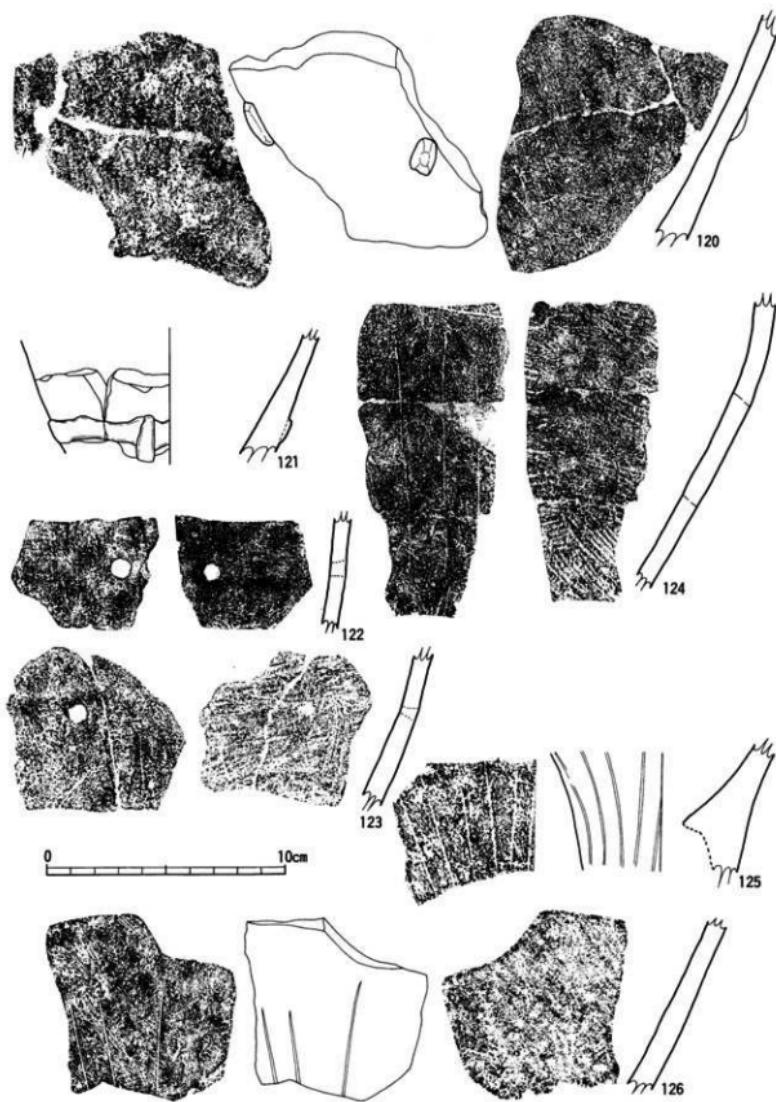
122・123は、胴部の外側から内側にかけて穿孔を施している。124~126は、胴下部に縦方向に沈線が施されている。124は土器片の上部には横方向の沈線が、その直下から縦方向の沈線が施されている。



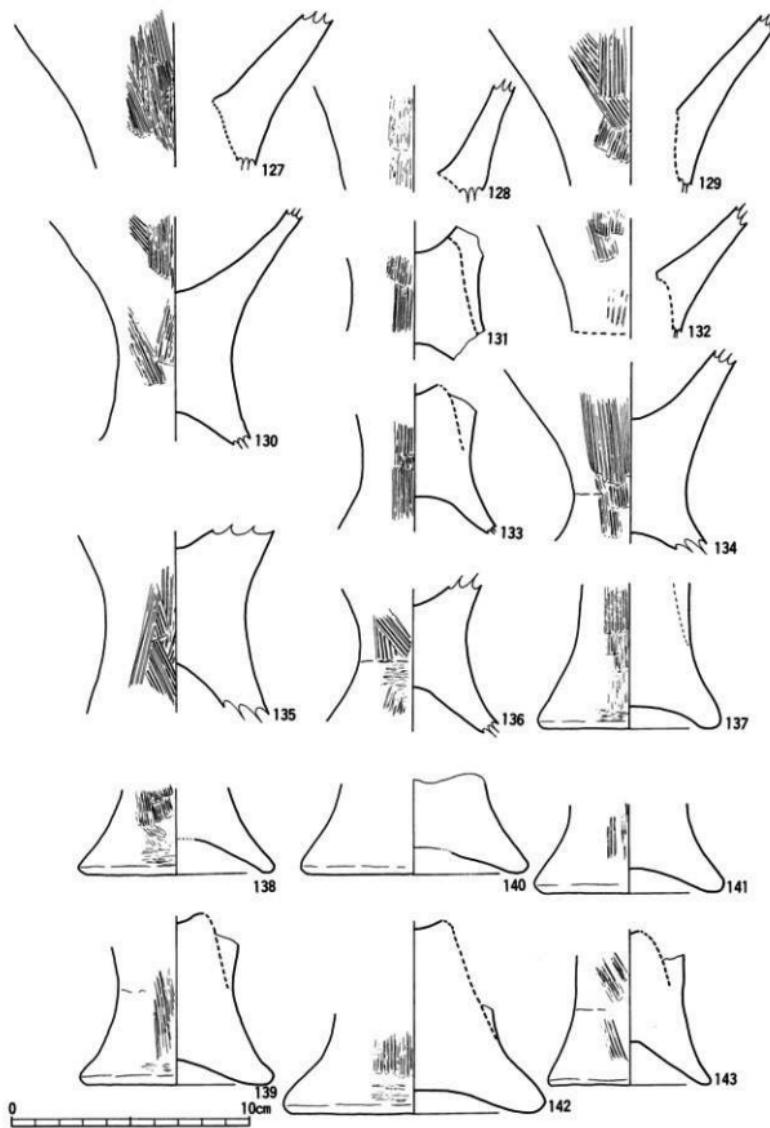
第21図 洪積区出土遺物(6)



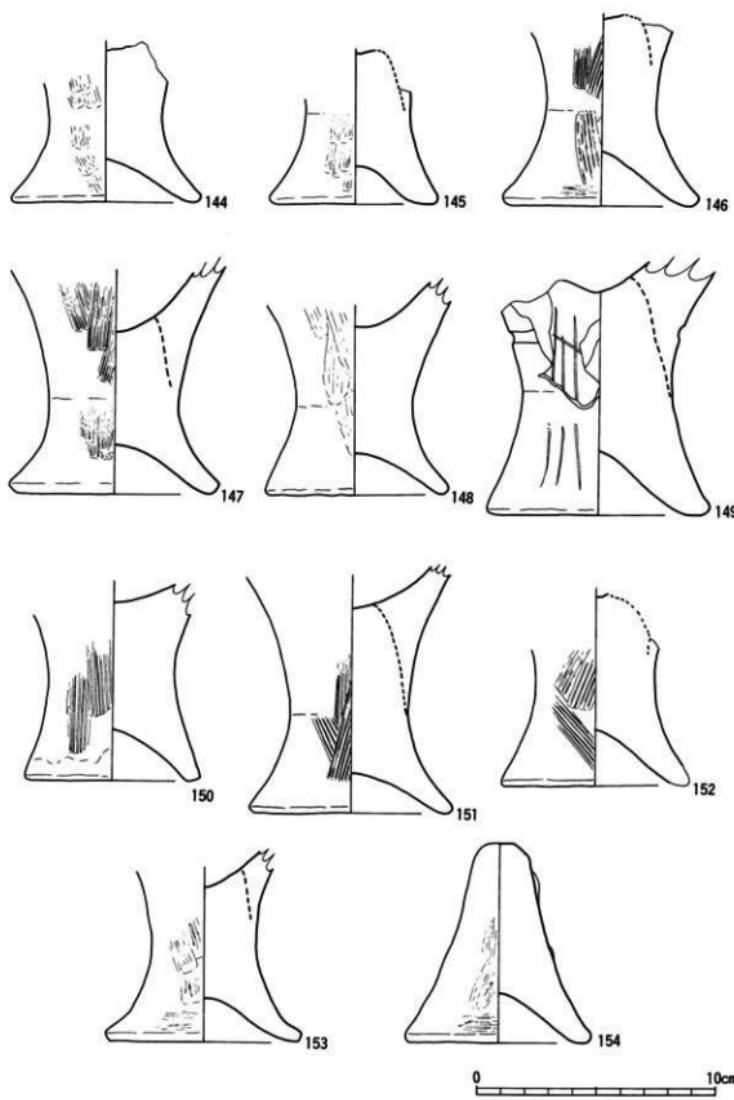
第22図 調査区出土遺物(7)



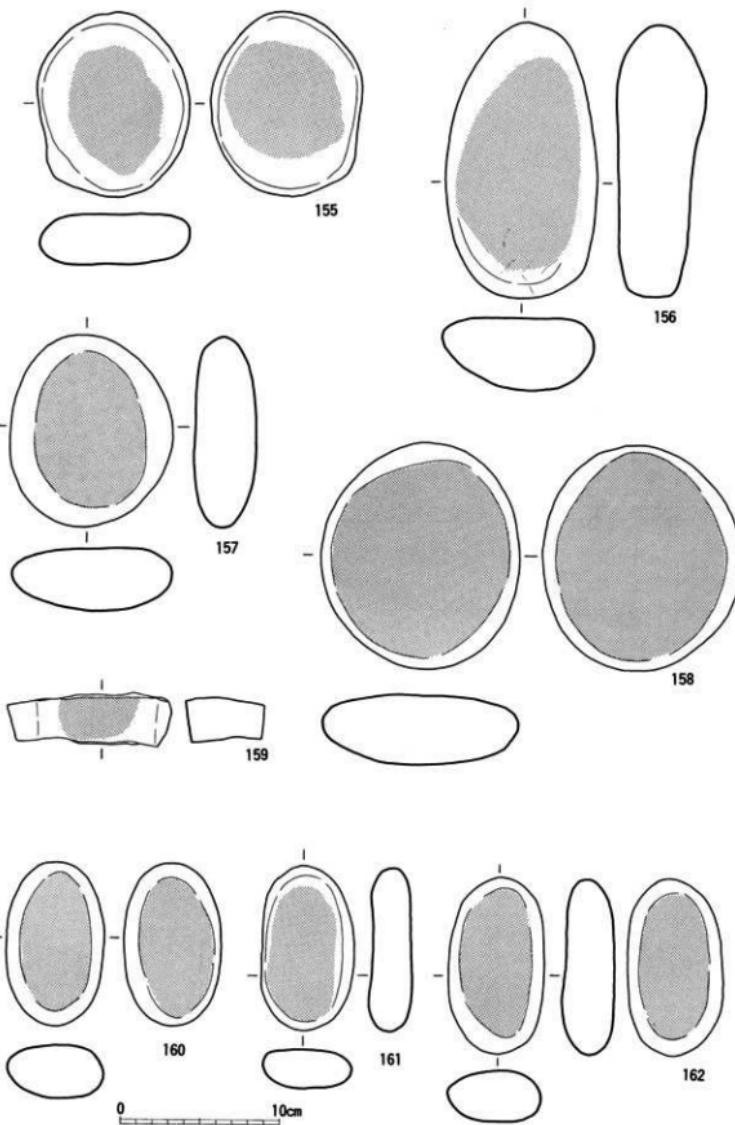
第23図 調査区出土遺物(8)



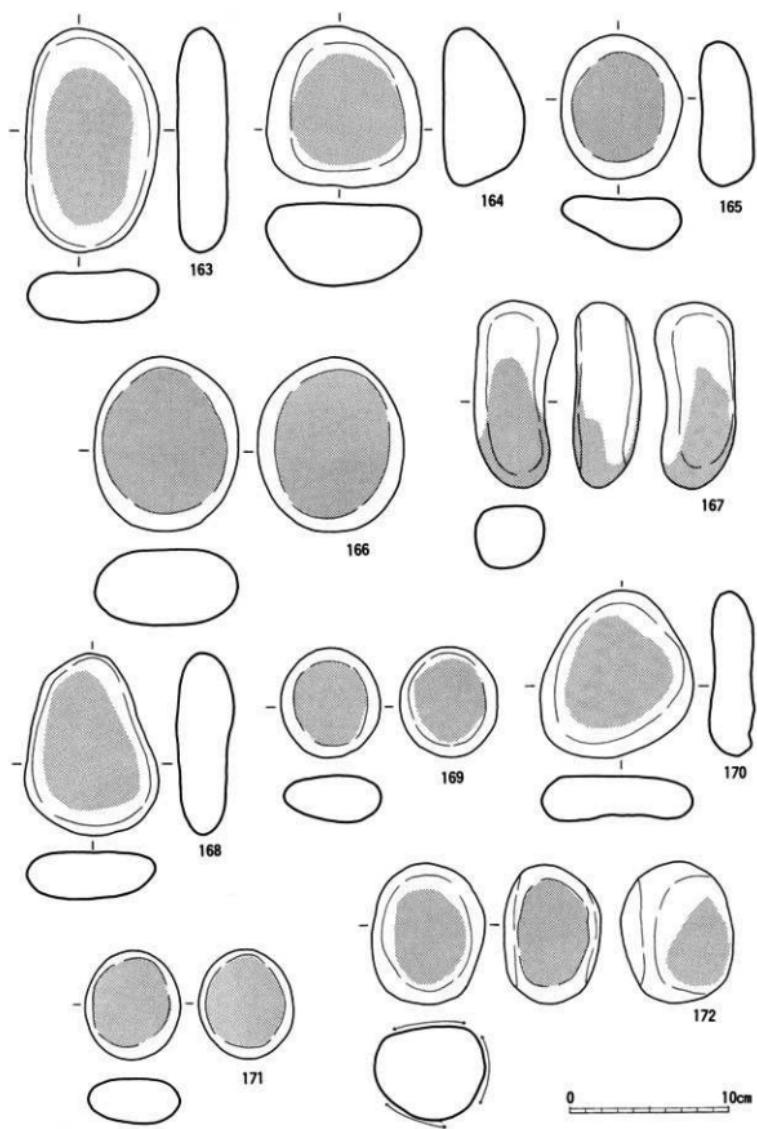
第24図 調査区出土遺物(9)



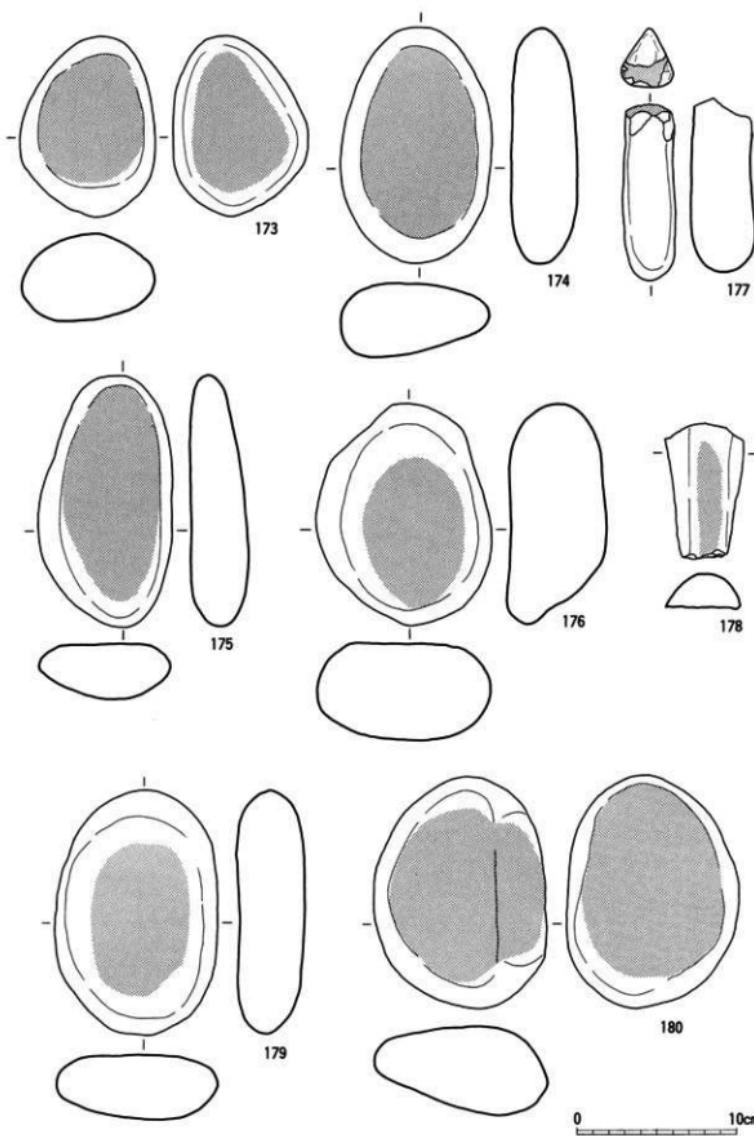
第25図 調査区出土遺物10)



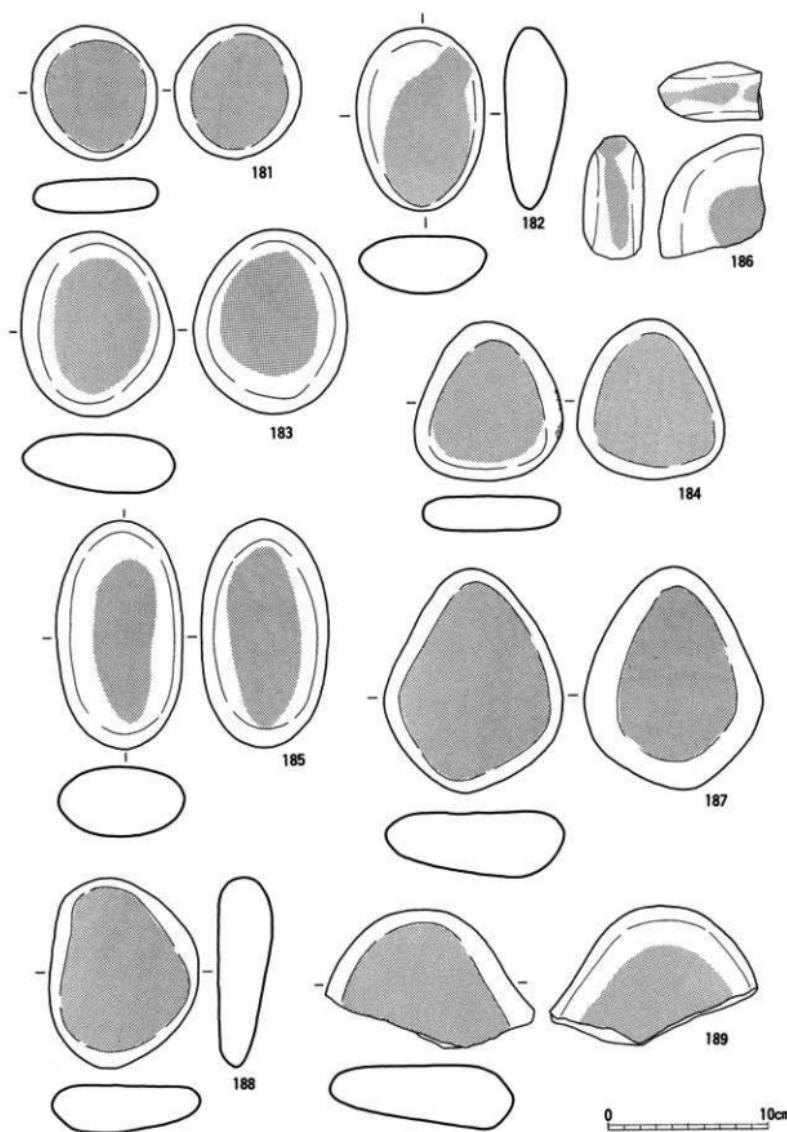
第26図 調査区出土遺物(1)



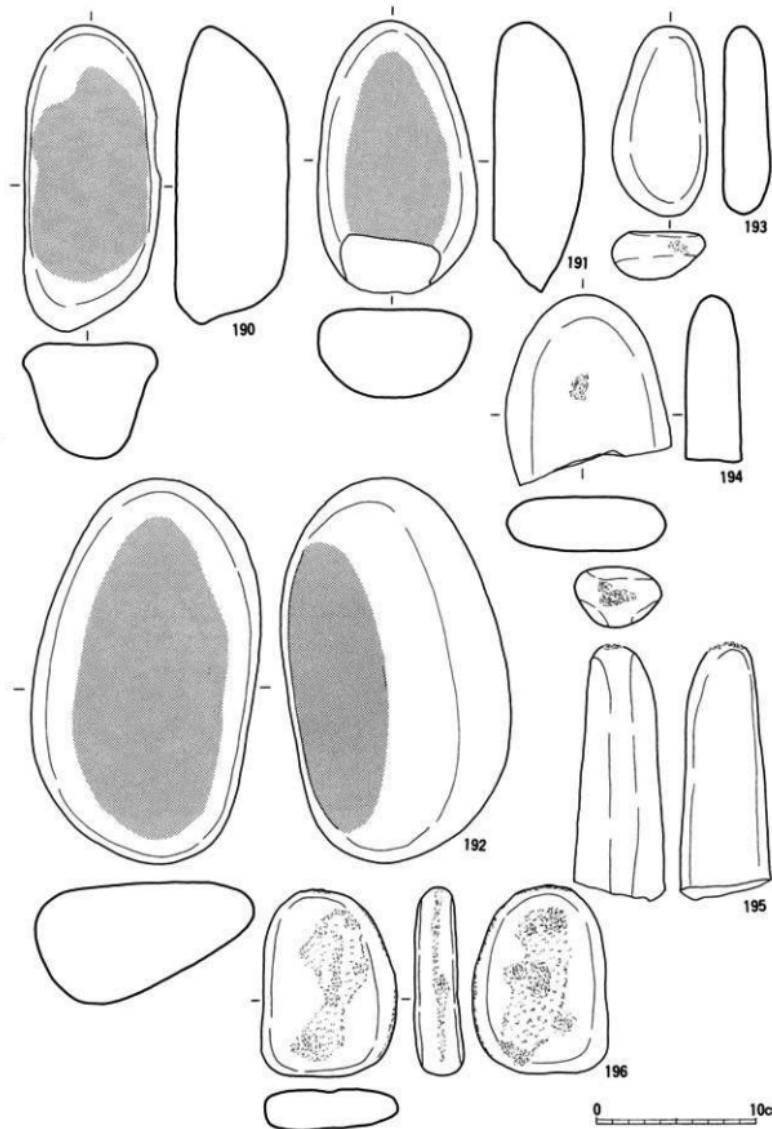
第27図 調査区出土遺物(12)



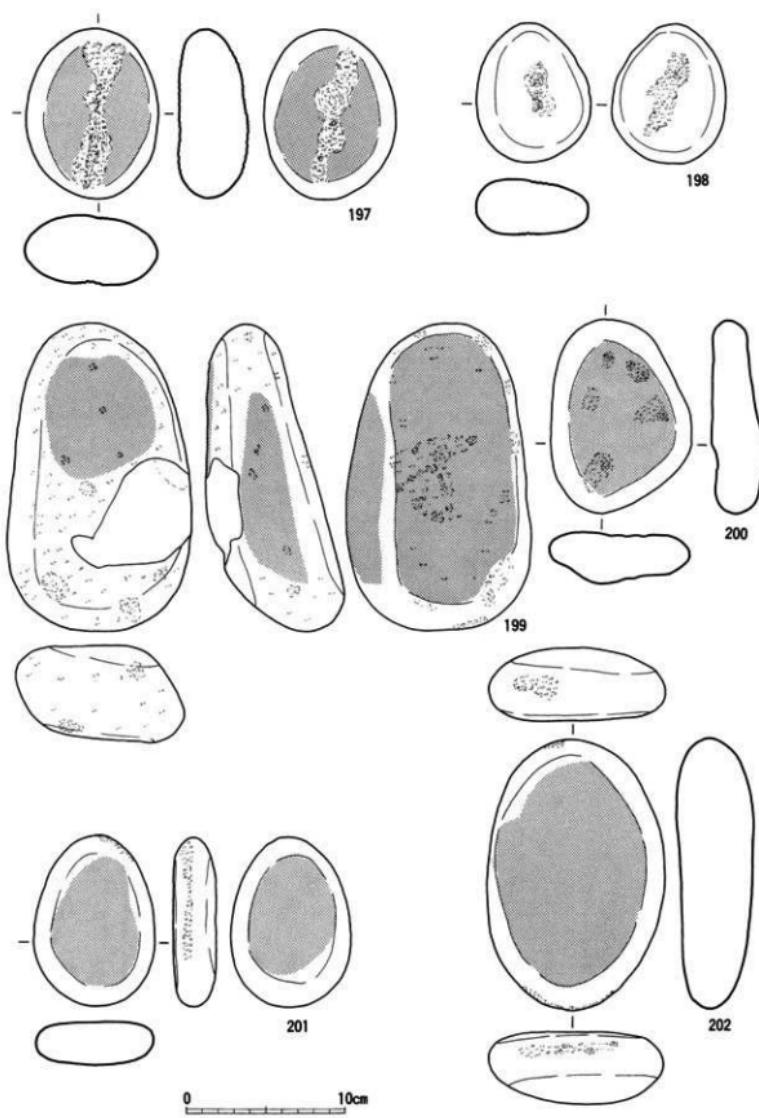
第28図 調査区出土遺物¹³



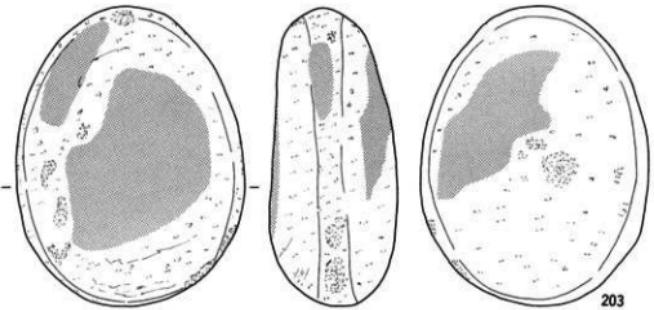
第29図 調査区出土遺物(14)



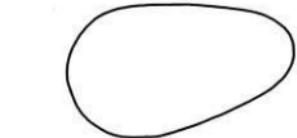
第30図 調査区出土遺物(15)



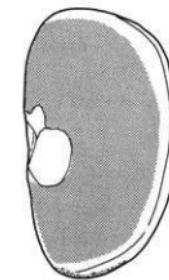
第31図 調査区出土遺物(16)



203



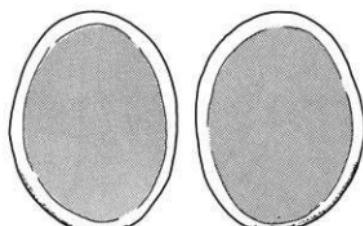
204



205



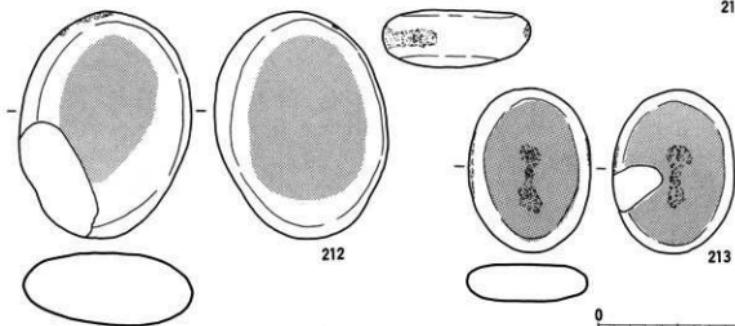
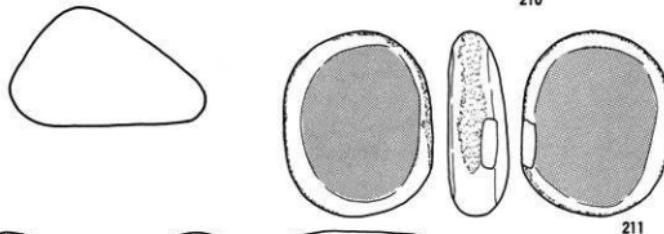
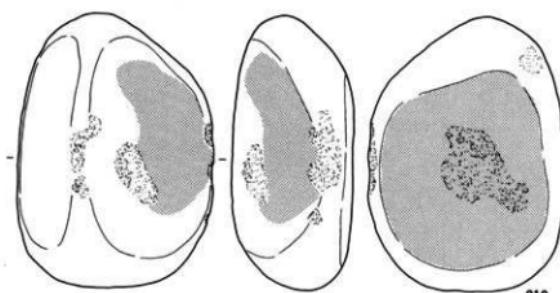
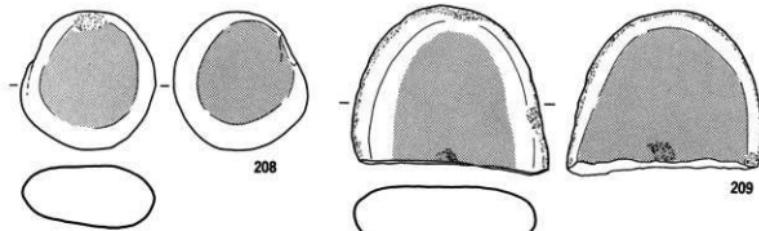
206



207

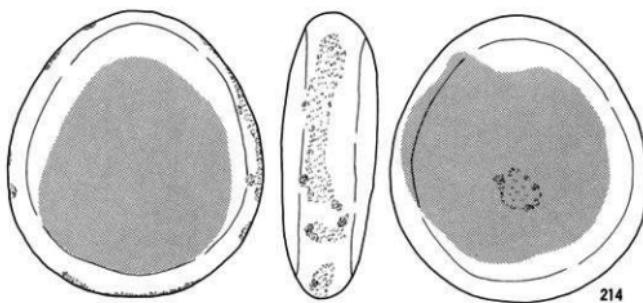
0 10cm

第32図 調査区出土遺物(1)

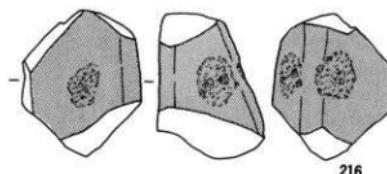
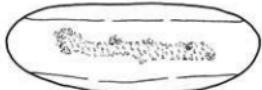


0 10cm

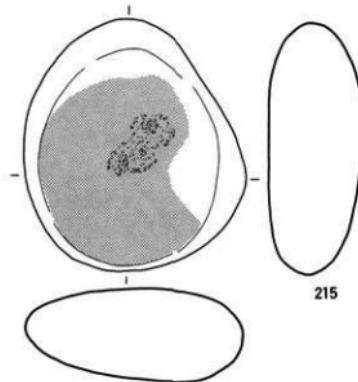
第33図 調査区出土遺物(1)



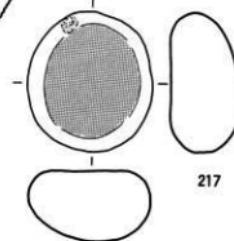
214



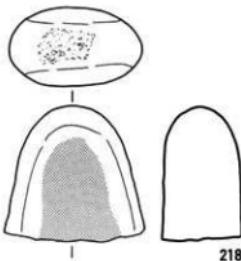
216



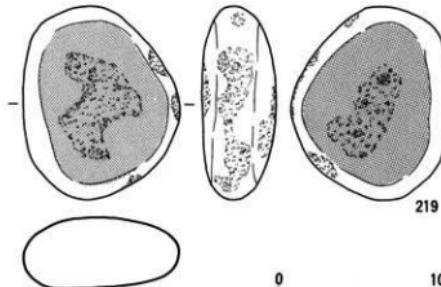
215



217



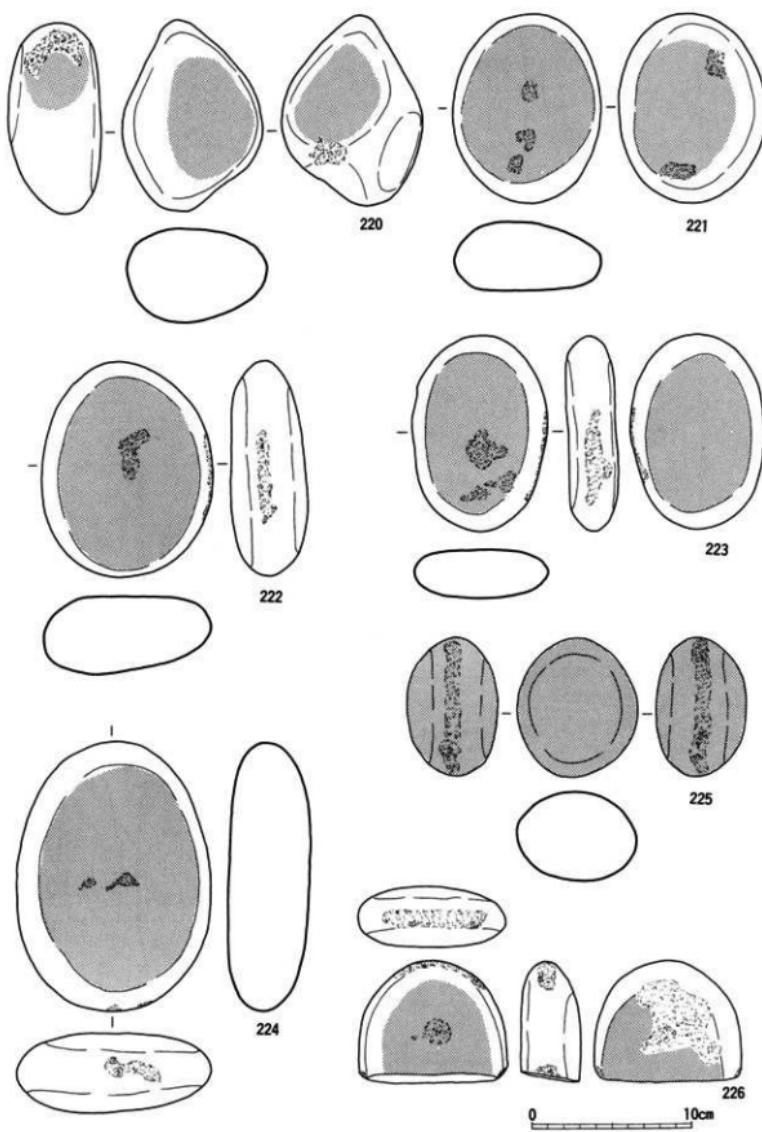
218



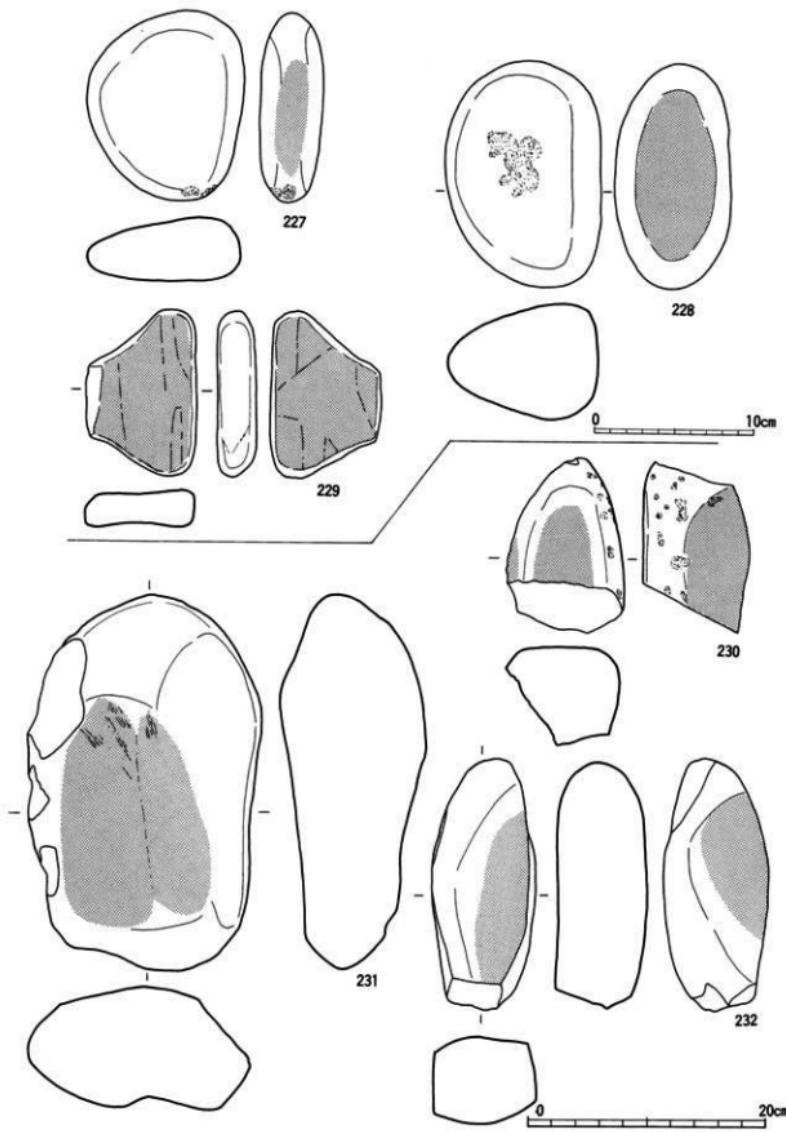
219

0 10cm

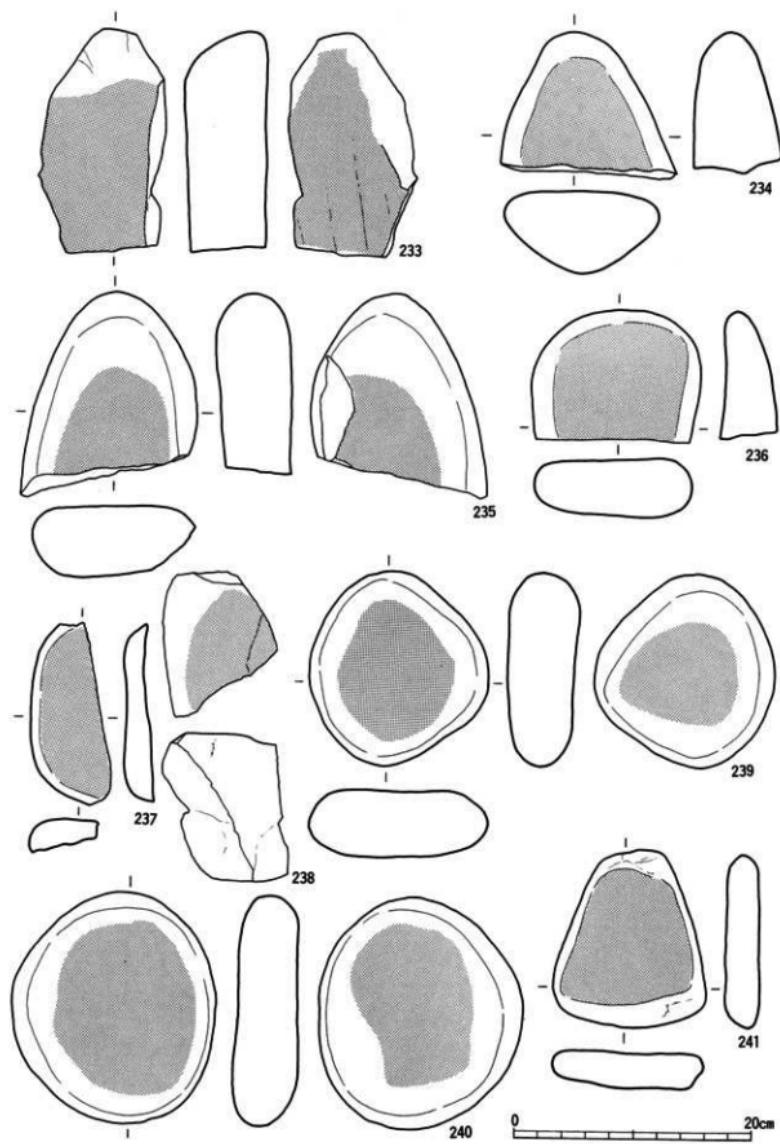
第34図 調査区出土遺物(19)



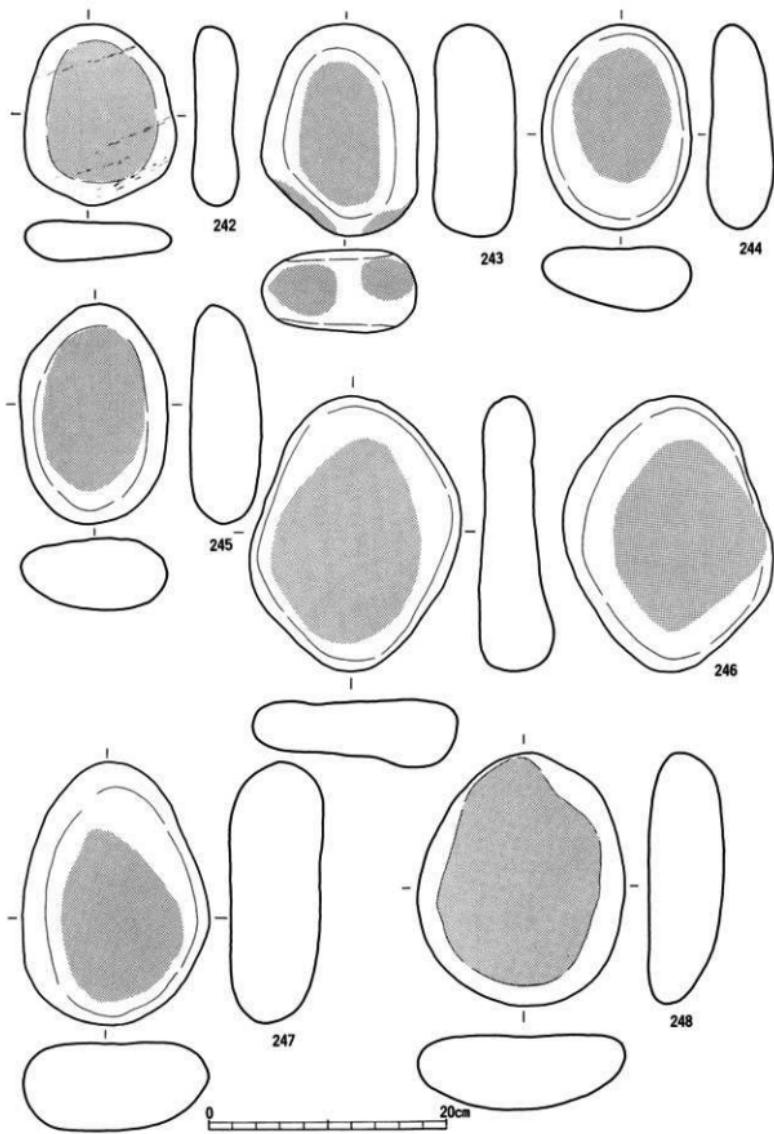
第35図 植查区出土遺物(2)



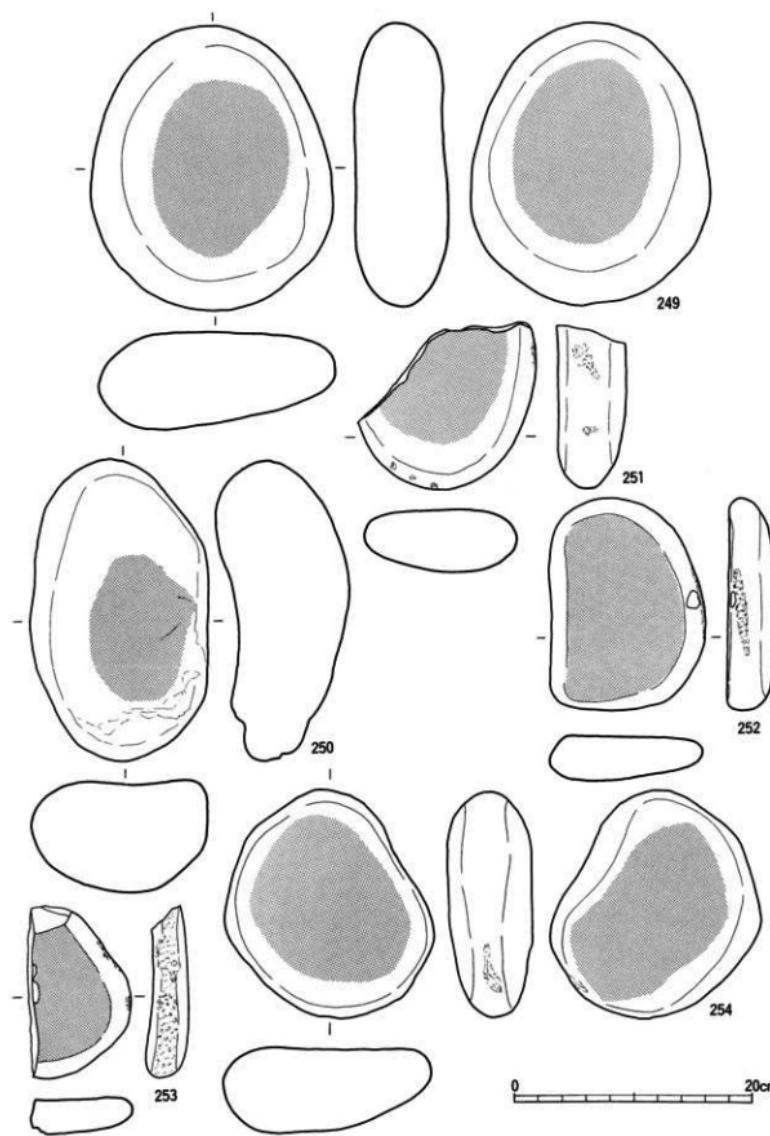
第36図 調査区出土遺物(2)



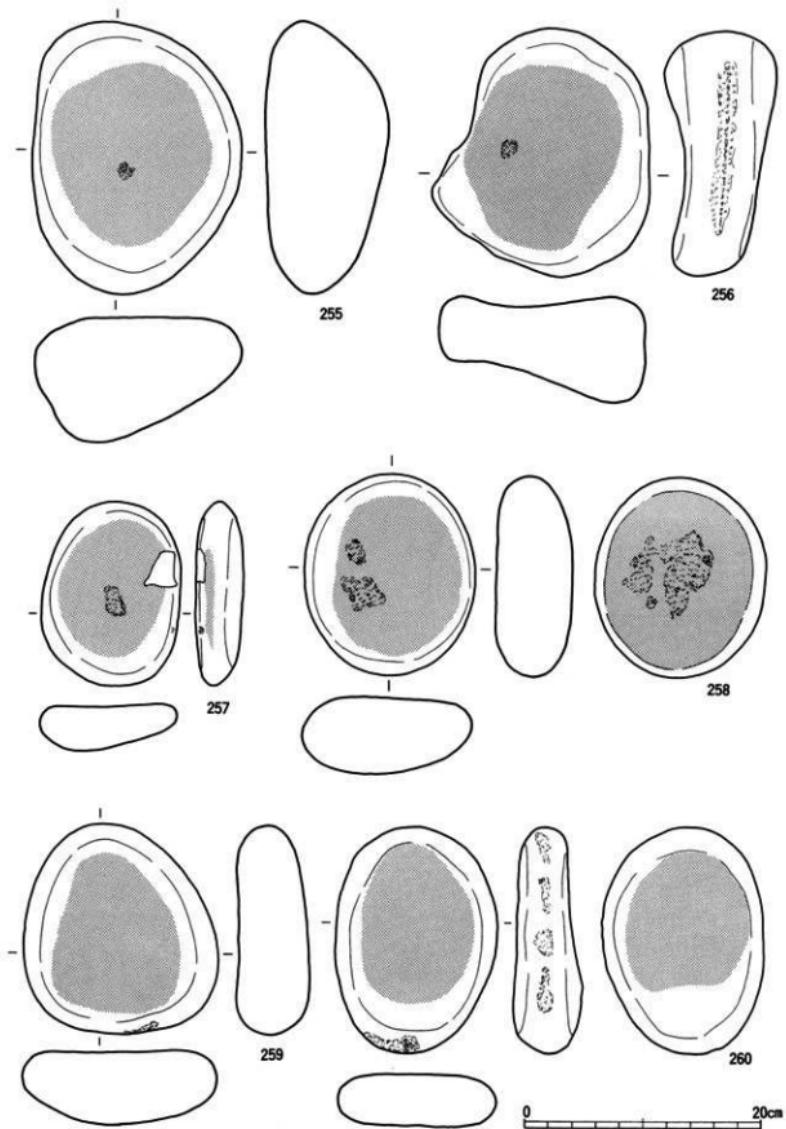
第37図 調査区出土遺物(2)



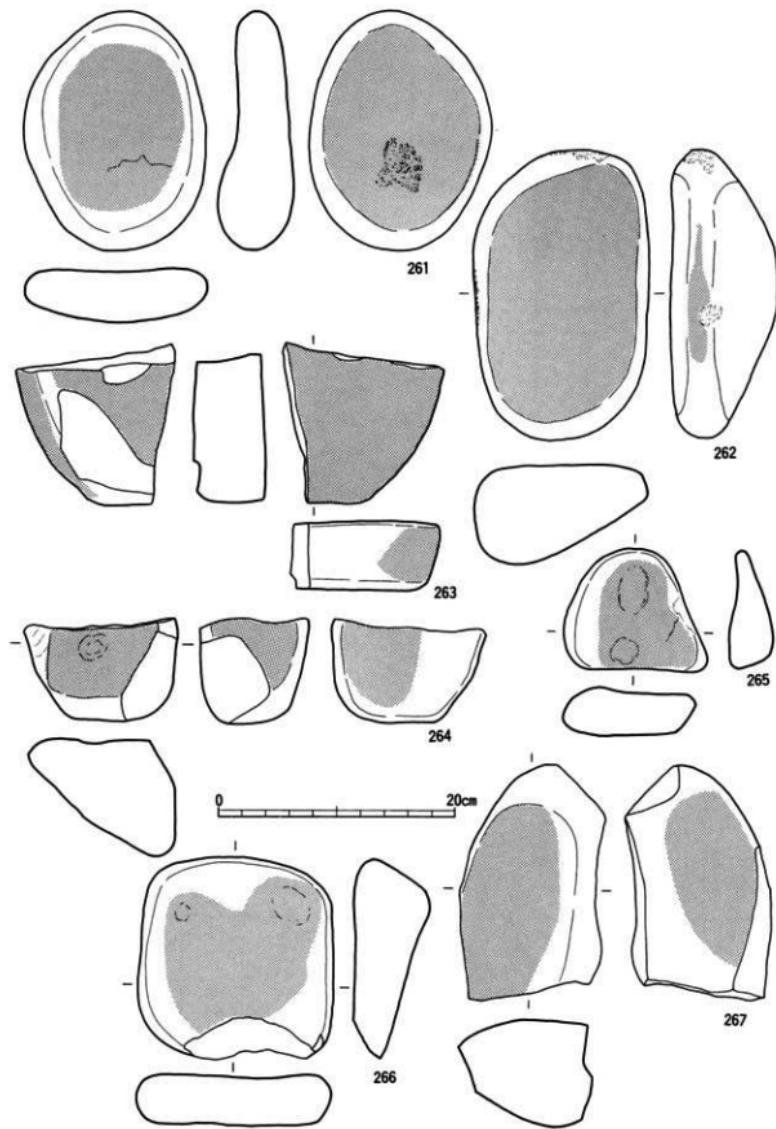
第38図 調査区出土遺物(2)



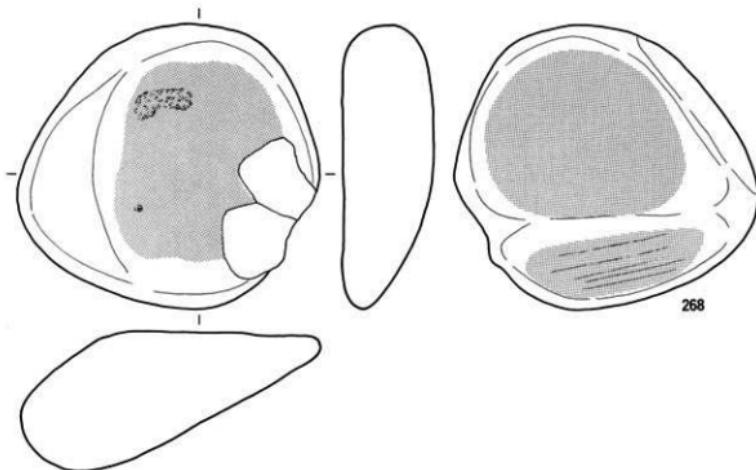
第39図 調査区出土遺物(24)



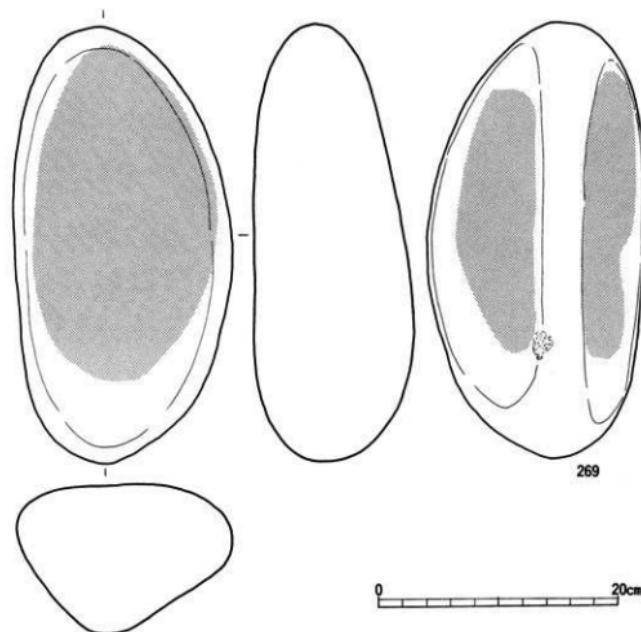
第40図 調査区出土遺物(25)



第41図 調査区出土遺物(26)



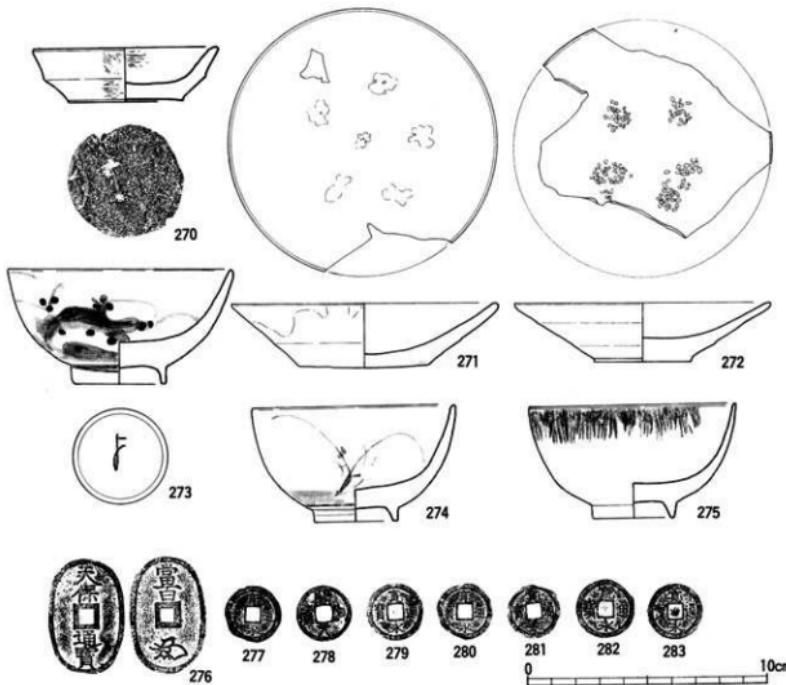
268



269

0 20cm

第42図 調査区出土遺物(2)



第43図 調査区出土遺物(2)

127～154は、胴下部から脚部にかけての遺物である。127～129・132は、胴下部で脚部との接合痕が明瞭に残る。131・133・137・139・142・143・145～147・149・151・153は、胴部との接合痕が残る。149は胴部と脚部を接合する際の製作過程がよくわかり、脚末端部近くまで縱方向の沈線がはいる。また、脚上部に一条の溝がめぐるが、焼成後に施されたものである。154は、胴部と接合する際の粘土がほとんど剥落した状態と思われる。138は表層出土で、その製作過程に違いがある。また、脚部はすべて上げ底であるが、浅いもの(137～142)と深いもの(143～154)がある。

【石器】 (第26～42図)

155～192は、磨石である。172は、三面を使用している。177は、棒状の石の破損面を磨面として使用する。181は、よく使用されている。

193～195は、敲打痕のある遺物である。196～198は、凹石である。197は、両面に磨面をもつ。199～228は、磨面と敲打痕の両方があるものである。そのほとんどの断面は楕円形かそれに近いものであるが、203・205・210・227・228のように断面が三角形のものもある。229～231は、砥石である。229は斜位の磨溝があり、230は破損しているが3面を使用し、231は斜位の擦痕がある。

232～269は、石皿である。欠損したものは別にして、239・240のように小振りのものが多い。

233~250は、一面もしくは二面に磨面だけあるものである。243は、側縁部を磨石としても使用している。251~254・256・259・260は側縁部に敲打痕のあるものである。262の側縁部には、磨面と敲打痕が残る。268・269は石皿と砥石の機能をもったものである。

なお、磨面はスクリーントーンで表してある。

【その他の遺物】(第43図)

270~283は、すべて表層出土である。270は灯明皿で、口縁部には煤が多く付着している。271は軸が口縁部外側に滴れ、272は砂目が顕著に残る。273~275は染め付けで、いずれも焼成温度が低かったためか釉がまわっていない。273の絵柄は稚拙である。271~275は、いずれも薩摩焼きで19世紀初めに比定できる。

276~283は、B-4区表層出土の天保通宝と寛永通宝である。

第6表 調査区出土土器観察表(1)

擇図 番号	遺物 番号	出土区	層	胎 土	焼成	色 調	外 面	内 面	備 考
第16 図	44	A-4	III	長石 石英 金雲母	良	暗褐色	ハケ	ハケ	薄手
	45	A-4	II, III	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ハケ	
	46	B-3	表	長石 石英 金雲母	良	褐色	ハケ	ナデ	
	47	A-4	IV	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	48	B-4	III	長石 石英 金雲母	良	明赤褐色	ナデ	ナデ	
	49	A-4	III	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	50	A-3	III	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	51	B-3	表	長石 石英 金雲母	良	赤褐色	ナデ	ナデ	
	52	B-5	III	長石 石英 金雲母	良	明赤褐色	ハケ	ハケ	
	53		表	長石 石英 金雲母	良	褐色	ナデ	ナデ	
第17 図	54	A-3	III	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	55	A-4	III	長石 石英 金雲母	良	暗褐色	ハケ		内面剥落
	56	A-4	III	長石 石英 金雲母	良	褐色	ハケ	ハケ	
	57	B-4	III	長石 石英 金雲母	良	灰黄褐色	ナデ	ナデ	
	58	B-4	III	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	59	A-3	III	長石 石英 金雲母	良	暗褐色	ハケ	ハケ	
	60	B-4	III	長石 石英 金雲母	良	暗褐色	ハケ	ハケ	
	61	A-3	表	長石 石英 金雲母	良	黒褐色	ハケ	ハケ	
	62	B-4	III	長石 石英 金雲母	普通	黒褐色	ナデ	ハケ	
	63		表	長石 石英 金雲母 砂粒	普通	明褐色	ナデ	ナデ	
第18 図	64	B-3	表	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	65	A-3	III	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	66		表	長石 石英 金雲母	普通	明褐色	ハケ	ハケ	
	67	A-4	III	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	68	B-4	III	長石 石英 金雲母 砂粒	良	暗灰褐色	ハケ		内面風化 外面上にスス付着
	69	A-3	III	長石 石英 金雲母	良	褐色	ナデ	ナデ	外面上にスス付着
	70	B-4	II	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ナデ	ナデ	

第7表 調査区出土土器観察表(2)

擇区番号	遺物番号	出土区	層	胎 土	焼成	色 調	外 面	内 面	備 考
第18区	71	B-4	III	長石 石英 金雲母	良	黒褐色	ハケ	ハケ	
	72	B-4	III	長石 石英 金雲母	良	明褐色			土師質
第19区	73	B-3	III	長石 石英 金雲母	普通	明赤褐色	ハケ	ナデ	縫の突帯
	74	B-3	IV	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	75	A-4	III	長石 石英 金雲母	普通	暗褐色	ハケ	ハケ	
	76	B-4	III	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ナデ	
	77	A-4	III	長石 石英 金雲母	普通	暗褐色	ハケ	ハケ	肥厚帯外面に凹み
	78	A-4	III	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ナデ	ナデ	
	79	A-4	III	長石 石英 金雲母	良	暗褐色	ハケ	ハケ	
	80	B-4	III	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ナデ	ナデ	
第20区	81	B-4	II	長石 石英 金雲母	良	暗褐色	ハケ	ハケ	
	82	A-3	表	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	83	A-4	表	長石 石英 金雲母	良	暗褐色	ハケ	ナデ	
	84	B-3	表	長石 石英 金雲母	良	褐色	ナデ	ナデ	口唇部に刺突?
	85	B-4	III	長石 石英 金雲母	良	明赤褐色	ハケ	ナデ	
	86	A-3	II	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	
	87	表	長石 石英 金雲母 砂粒	良	明赤褐色	ナデ	風化		
	88	B-4	III	長石 石英 金雲母	普通	暗褐色	ハケ	ハケ	
第21区	89	表	長石 石英 金雲母	良	暗褐色	ハケ	ハケ		口唇部に刺突
	90	表	長石 石英	良	褐色	ハケ	ハケ		
	91	A-4	III	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ナデ	ナデ	
	92	B-4	III	長石 石英 金雲母	普通	褐色	ナデ	ナデ	
	93	A-4	III	長石 石英	良	暗褐色	ハケ	ハケ	
	94	A-3	II	長石 石英 金雲母	普通	暗褐色	ナデ	ナデ	
	95	表	長石 石英 金雲母	良	黒褐色	ナデ	ハケ		口唇部に刺突
	96	表	長石 石英 金雲母	普通	褐色	ナデ	ナデ		口唇部に刺突
第22区	97	B-3	表	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ハケ	ナデ	
	98	B-3	II	長石 石英 金雲母	普通	暗赤褐色	ナデ	ナデ	
	99	表	長石 石英 金雲母	良	褐色	ハケ	ハケ		
	100	表	長石 石英 金雲母	良	褐色	ハケ	ハケ		
	101	表	長石 石英 金雲母	良	灰黃褐色	ナデ	ハケ		
	102	B-2	表	長石 石英 金雲母	良	暗赤褐色	ハケ	ハケ	
	103	表	長石 石英 金雲母	良	暗赤褐色	ハケ	ハケ		
	104	表	長石 石英 金雲母	普通	暗褐色	ハケ	ハケ		細い突帯
	105	表	長石 石英 金雲母	良	褐色	ハケ	ハケ		
	106	B-4	III	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ハケ	ナデ	
	107	B-4	III	長石 石英 金雲母	良	褐色	ハケ	ナデ	
	108	B-3	表	長石 石英 金雲母	良	暗褐色	ハケ	ハケ	
	109	B-4	III	長石 石英 金雲母	普通	暗赤褐色	ナデ	ナデ	
	110	表	長石 石英 金雲母	普通	褐色	ナデ	ナデ		

第8表 調査区出土土器觀察表(3)

探査番号	遺物番号	出土区	層	胎 土	焼成	色 調	外 面	内 面	備 考
第22回	111	B-3	表	長石 石英 金雲母 砂粒	普通	黒褐色	ナデ	ナデ	
	112	B-3	表	長石 石英	良	黒褐色	ナデ	ナデ	
	113		表	長石 石英 金雲母	良	暗褐色	ハケ	ハケ	縦の突蒂
	114	A-4	IV	長石 石英 金雲母	良	緑灰色	ハケ	ハケ	全面薄く外側に煤付着
	115		表	長石 石英 金雲母	良	明赤褐色	ナデ	ナデ	
	116	B-4	III	長石 石英 金雲母	良	暗褐色	ナデ	ナデ	
	117	B-4	III	長石 石英 金雲母	良	灰褐色	ハケ	ハケ	
	118	B-4	表	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ナデ	
	119	B-4	表	長石 石英 金雲母	普通	褐色	ナデ	ナデ	
第23回	120	B-4	表	長石 石英 金雲母	普通	明赤褐色	ナデ	ハケ	外面調整は粗い
	121	B-4	III	長石 石英 金雲母	普通	褐色	ナデ	ナデ	胴下部に突蒂
	122	A-4	表	長石 石英 金雲母	良	暗褐色	ハケ	ナデ	穿孔
	123	B-3	表	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ナデ	ナデ	
第24回	124	B-4	表	長石 石英 金雲母	普通	褐色	ハケ	ハケ	胴下部に沈線
	125	B-4	II	長石 石英 金雲母	普通	明赤褐色	ハケ	ナデ	胴下部に沈線
	126	B-4	III	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ハケ	?	胴下部に沈線
	127	A-3	II	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ナデ	
第25回	128		表	長石 石英 金雲母	普通	赤褐色	ナデ	ナデ	
	129	A-4	III	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ナデ	内側に炭化物付着
	130	B-5	III	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ナデ	
	131	B-4	II	長石 石英 金雲母	良	褐色	ハケ	ハケ	内底に炭化物付着
	132	B-4	III	長石 石英 金雲母 砂粒	普通	黄褐色	ハケ	ハケ	
	133	B-4	III	長石 石英 金雲母 砂粒	普通	赤褐色	ハケ		
	134	A-4	III	長石 石英 金雲母 砂粒	普通	明赤褐色	ハケ	ハケ	
	135	A-4	III	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ハケ	ハケ	ていねいな調整
	136	A-4	III	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ハケ	ハケ	内底に炭化物付着
第26回	137	B-2	表	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ハケ		
	138	B-3	表	長石 石英 金雲母	良	黄褐色	ハケ		
	139	B-4	II	長石 石英 金雲母	普通	褐色	ハケ		多少風化
	140		表採	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色			風化
	141	B-4	III	長石 石英 金雲母	普通	明赤黃褐色	ハケ		
	142*	B-4	III	長石 石英 金雲母	普通	褐色	ハケ		
	143	B-4	表	長石 石英 金雲母	良	褐色	ハケ		
	144	A-3	II	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ハケ		
	145	B-4	II	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ハケ		
第27回	146	B-4	III	長石 石英 金雲母	普通	褐色	ハケ		
	147	B-4	IV	長石 石英 金雲母	良	褐色	ハケ	ナデ	ていねいな調整
	148	A-4	III	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ナデ	ナデ	内底に炭化物付着
	149	B-4	III	長石 石英 金雲母	普通	黄褐色	ハケ		
	150	A-4	III	長石 石英 金雲母 黒雲母	普通	黄褐色	ハケ		多少風化

第9表 調査区出土土器観察表(4)

探査番号	遺物番号	出土区	層	胎 土		焼成	色 調	外 面	内 面	備 考
				長石	石英	金雲母	黑雲母			
第25 図	151	B-4	III	長石 砂粒	石英	金雲母	黑雲母	良	褐色	ハケ
	152	B-2	表	長石	石英	金雲母		普通	褐色	ハケ
	153	B-4	III	長石	石英	金雲母		普通	褐色	ナデ
	154	B-4	III	長石	石英	金雲母		普通	褐色	ナデ

第10表 調査区出土石器観察表(1)

探査 番号	番号	出土区	層	器 標	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重量kg	観察所見	
										1	2
第26 図	155	A 3	II	磨石	花崗岩	11.5	9.4	3.3	0.55		
	156	A 3	II	*	砂岩	17.2	9.6	5.4	1.24		
	157	A 4	IV	*	砂岩	12.1	10.1	4.0	0.72		
	158	A 4	III	*	砂岩	14.2	12.4	4.5	1.14	両面	
	159	A 4	IV	*	砂岩	3.1	10.3	5.3	0.21	破損	
	160	A 4	III	*	砂岩	10.3	6.2	3.3	0.3	両面	
	161	A 4	III	*	花崗岩	10.3	5.8	2.5	0.24		
	162	A 4	III	*	砂岩	11.0	5.9	3.2	0.32	両面	
第27 図	163	A 4	III	*	花崗岩	14.0	8.3	3.1	0.58		
	164	A 4	III	*	砂岩	10.0	9.6	5.2	0.67		
	165		III	*	花崗岩	9.1	7.5	3.4	0.33		
	166	B 3	II	*	花崗岩	10.9	9.0	4.8	0.7	両面	
	167		表	*	砂岩	11.7	4.5	4.1	0.35		
	168	B 3	IV	*	花崗岩	11.4	8.5	3.5	0.44		
	169	B 4	III	*	砂岩	6.9	6.1	3.0	0.17	両面	
	170	B 4	IV	*	花崗岩	10.4	9.5	3.2	0.43		
	171	B 4	III	*	砂岩	6.9	5.9	2.8	0.16	両面	
	172	B 4	III	*	花崗岩	8.9	7.0	5.8	0.52	三面	
第28 図	173	B 4	III	*	花崗岩	11.4	8.4	5.3	0.69	両面	
	174	B 4	III	*	砂岩	14.7	9.3	4.9	0.91		
	175	B 4	IV	*	砂岩	15.6	8.4	3.7	0.68		
	176	B 4	III	*	花崗岩	14.0	10.9	6.1	1.36		
	177	B 4	IV	*	砂岩	11.1	3.3	4.5	0.25	棒状	
	178	B 4	III	*	砂岩	8.4	4.9	2.1	0.1	破損	
	179	B 4	III	*	花崗岩	15.2	10.2	4.1	1.03		
	180	B 4	III	*	花崗岩	14.5	10.8	6.2	1.28	両面	
	181	B 4	III	*	花崗岩	8.3	7.8	2.3	0.22	両面	
	182	B 4	III	*	砂岩	11.5	8.0	3.7	0.46		
第29 図	183	B 4	II	*	砂岩	11.5	9.6	3.7	0.6	両面	
	184	B 4	III	*	花崗岩	10.0	9.2	2.4	0.33		
	185	B 4	III	*	砂岩	14.2	7.9	4.3	0.74	両面	
	186	B 4	III	*	砂岩	6.7	6.4	3.5	0.24	破損	
	187	B 4	IV	*	砂岩	13.9	11.2	4.4	0.87	両面	
	188	B 4	III	*	砂岩	12.0	9.4	3.4	0.51		
	189	B 4	III	*	砂岩	8.5	12.0	4.0	0.54	破損, 両面	

第11表 調査区出土石器観察表(2)

探団	番号	出土区	層	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重量kg	観察所見
第30 団	190	B 4	III	磨石	砂岩	18.9	8.5	7.5	1.57	
	191	B 4	III	◆	砂岩	16.9	10.0	5.7	1.38	一部破損
	192	B 4	III	◆	砂岩	24.0	14.0	7.9	3.73	両面・断面三角形
	193	B 4	III	敲石	砂岩	11.9	5.9	3.1	0.3	
	194	B 4	III	◆	砂岩	10.5	10.2	3.5	0.6	破損
	195	A 4	IV	◆	砂岩	15.6	5.6	3.8	0.5	棒状
	196	B 3	II	凹石	花崗岩	11.7	8.3	2.9	0.41	両面偏平な石
第31 団	197	A 3	II	凹石	砂岩	9.4	7.3	3.7	0.36	両面・磨面
	198	B 4	III	凹石	砂岩	8.7	7.1	3.6	0.31	
	199	A 3	III	敲石	砂岩	19.3	11.5	7.0	2.2	磨面
	200	A 4	IV	◆	花崗岩	12.2	8.8	3.2	0.47	◆
	201	A 4	II	◆	砂岩	10.7	7.5	2.8	0.35	◆
	202	A 4	III	◆	砂岩	16.8	11.2	4.5	1.28	◆
	203	A 3	III	◆	砂岩	18.8	14.2	8.5	3.08	◆
第32 団	204	B 3	III	◆	砂岩	16.9	9.5	5.5	1.21	◆ + 一部破損
	205	A 4	III	◆	砂岩	14.6	10.7	5.1	1.1	◆ + 断面三角形
	206	B 3	III	◆	砂岩	13.8	10.4	3.6	0.8	両面に磨面
	207	B 3	III	◆	砂岩	14.8	5.7	4.8	0.68	破損・磨面
	208	B 4	III	◆	花崗岩	8.7	8.3	3.8	0.39	両面に磨面
	209	B 4	III	◆	砂岩	9.9	12.0	4.5	0.84	破損・両面に磨面
	210	B 4	IV	◆	砂岩	17.1	12.3	8.0	2.2	断面三角形・三面に磨面
第33 団	211	B 4	III	◆	砂岩	11.6	9.3	3.7	0.63	両面の磨面は、よく使い込まれる
	212	B 4	II	◆	砂岩	14.3	10.7	4.5	0.96	一部破損
	213	B 4	II	◆	花崗岩	10.3	7.6	2.4	0.29	一部破損
	214	B 4	III	◆	砂岩	18.0	15.8	5.8	2.37	両面に磨面
	215	B 4	III	◆	砂岩	15.8	13.8	5.7	1.76	磨面
	216	B 4	III	◆	砂岩	9.1	7.3	6.2	0.5	破損、3面に磨面と敲打痕
	217	B 4	III	◆	花崗岩	8.8	7.9	4.5	0.45	よく使い込まれた磨面
第34 団	218	B 4	III	◆	砂岩	8.5	8.7	5.0	0.49	
	219	B 4	IV	◆	砂岩	12.2	9.8	4.6	0.77	両面に磨面
	220	B 4	III	◆	砂岩	12.1	8.8	5.7	0.8	3面
	221	B 4	II	◆	砂岩	11.9	9.2	4.5	0.68	両面に磨面
	222	B 4	III	◆	砂岩	13.4	10.7	4.8	1.01	磨面
	223	B 4	III	◆	花崗岩	12.3	8.4	3.1	0.5	両面に磨面
	224	B 4	III	◆	砂岩	16.9	12.2	5.0	1.56	片面に磨面
第35 団	225	B 4	III	◆	砂岩	8.8	7.6	5.5	0.47	側縁部に敲打痕、全面に磨面
	226	B 4	III	◆	砂岩	7.1	9.2	3.8	0.39	破損、表裏スリ、タタキ、周りタタキ、両面に磨面
	227	B 4	IV	◆	砂岩	12.0	9.8	4.0	0.66	側縁部に磨面
	228	B 4	III	◆	砂岩	14.2	9.7	7.2	1.4	断面三角形
	229	B 4	II	砾石	花崗岩	10.5	6.9	7.0	0.24	両面

第12表 調査区出土石器観察表(3)

擇区	番号	出土区	層	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重量kg	観察所見
第36区	230	B 4	III	砥石	砂岩	14.4	10.0	9.0	1.29	両面・破損
	231	B 4	III	砥石	砂岩	31.5	19.6	11.5	9.3	
	232	A 4	表	石皿	砂岩	21.0	8.8	7.5	2.18	破損後磨石として使用
第37区	233	A 4	IV	石皿	砂岩	18.6	10.2	7.0	2.08	両面・破損
	234	B 4	III	石皿	砂岩	11.7	14.5	7.4	1.42	
	235	B 4	III	石皿	砂岩	15.2	14.0	6.7	2.3	両面・破損
	236	B 4	III	石皿	砂岩	10.8	14.1	4.8	1.17	破損
	237	B 4	III	石皿	砂岩	15.0	6.5	2.8	0.38	破損
	238	A 3	III	石皿	砂岩	11.8	9.5	12.8	1.34	破損
	239	B 4	III	石皿	花崗岩	16.3	15.1	5.8	2.1	
	240	A 4	III	石皿	花崗岩	19.4	17.2	5.5	2.86	両面
第38区	241	A 4	III	石皿	砂岩	14.9	12.8	3.1	0.97	偏平な石を利用する
	242	B 4	III	石皿	砂岩	15.2	12.8	3.8	1.1	
	243	A 3	II	石皿	花崗岩	17.8	13.1	6.8	2.53	側縁部に磨面
	244	B 4	III	石皿	砂岩	17.2	12.6	5.5	1.7	
	245	B 4	IV	石皿	花崗岩	18.4	12.5	6.3	2.08	
	246	A 4	IV	石皿	花崗岩	23.1	17.5	6.2	3.47	両面
	247	B 4	III	石皿	花崗岩	22.1	15.7	8.0	4.05	
	248	B 4	III	石皿	砂岩	21.2	17.3	6.4	3.36	
第39区	249	B 4	III	石皿	花崗岩	23.9	20.3	8.5	5.77	両面
	250	B 4	III	石皿	花崗岩	25.3	15.0	11.0	5.46	
	251	B 4	III	石皿	砂岩	13.4	13.8	5.7	1.58	破損・側縁部に敲打痕
	252	B 4	IV	石皿	砂岩	17.8	13.0	3.8	1.47	側縁部に敲打痕
	253	A 4	IV	石皿	砂岩	14.5	8.7	3.1	0.55	破損・側縁部に敲打痕
第40区	254	A 4	IV	石皿	花崗岩	19.0	17.5	7.2	3.26	側縁に敲打痕
	255	B 4	IV	石皿	砂岩	22.7	17.5	10.4	5.45	上面に敲打痕
	256	A 4	III	石皿	砂岩	20.8	18.2	9.7	4.38	上面と側縁部に敲打痕
	257	B 4	III	石皿	砂岩	15.5	11.6	3.9	1.12	上面に敲打痕・側縁部に磨面
	258	B 4	IV	石皿	砂岩	16.9	14.4	6.6	2.3	両面・上面下面に敲打痕
	259	B 4	IV	石皿	砂岩	17.5	16.5	6.7	2.83	側縁部に敲打痕
第41区	260	B 4	IV	石皿	花崗岩	19.0	13.5	5.8	2.1	両面・側縁部に敲打痕
	261	A 4	III	石皿	砂岩	20.0	15.4	6.3	2.43	両面・下面に敲打痕
	262	B 4	III	石皿	砂岩	24.2	14.8	8.5	4.34	側縁部に敲打痕と磨面
	263	A 4	III	石皿	砂岩	12.7	13.3	5.9	1.56	破損・両面・側縁部に磨面
	264	A 4	III	石皿	砂岩	8.1	13.0	9.6	1.27	破損3面
	265	B 4	III	石皿	砂岩	10.0	11.9	4.0	0.62	
	266	B 4	III	石皿	砂岩	17.0	16.4	6.8	2.51	一部破損
第42区	267	A 4	IV	石皿	砂岩	18.8	11.6	9.6	3.29	両面
	268	A 4	IV	石皿	砂岩	23.9	25.3	11.1	7.67	上面に敲打痕・下面に磨溝
	269	B 4	III	砥石	砂岩	36.9	18.3	13.3	11.8	3面

第V章 まとめ

資料化されたものの少ない上能野式土器が出土した今回の調査結果は、この時期の解明のために貴重な資料をもたらした。ここでは、上能野式土器を中心に火ノ上山遺跡の調査成果をまとめるとしている。

遺跡の範囲について

火ノ上山遺跡は、弥生時代前期から古墳時代にかけての遺跡である。昭和50年代に、本遺跡の主体部と思われる宮浦中学校の校庭造成作業が行われた。この造成作業に参加した方々の話によると、地形は平坦ではなく起伏に富んだ砂丘地で、多量の土器片が出土したらしい。今回の調査区域は現砂丘の後背地に立地していることから、それ以前に形成された砂丘の後背地に人々が生活を営んだことは予想される。のことから遺跡の主体部は、宮浦中学校の校庭でその造成時にすでに破壊されたと思われる。しかし、現砂丘の後背地である今回調査を実施した付近にからうじて遺跡が残存すると思われる。しかし、周辺は住宅等の建設と旧地形が不明なことから確定はできないが、調査区の南北、海岸線と平行な現砂丘の後背地に広がる可能性がある。今後の開発の際には注意が必要である。

本遺跡出土土器の特徴について

上能野式土器の標式遺跡である上能野貝塚の発掘調査は、昭和47年に実施されている。その概報に「・・・この土器は中形の釣鐘形で、充実した脚台をもっている。底部中心部がわずかに凹み、あげ底風になっているのが特徴である。・・・文様はするどい範囲によって胴部以上に描かれ、直線と曲線を組み合わせた特色のあるもので、二並行線を基本文様として、山形又はその変形で構成され、間に二並行線間を斜線で充めたものである。口縁部外面と頸部には粘土紐をめぐらし、口縁部は肥厚して断面は三角形を呈する。・・・」と上能野式土器を述べている。本遺跡の包含層出土の土器はそのほとんどがこの型式の範疇に含まれるものである。ただし、71は口縁部が肥厚しない無文の土器であるが、胎土・調整とも他の土器と同じである。72は、土師質の土器である。71が上能野式土器の範疇に含まれるかについては不明で、72は明らかに異なる。

本遺跡出土の上能野式土器の出土量は、さほど多くはないが、その中の特徴を述べる。

器形は、釣り鐘形で脚台をもつ壺形土器であるが、壺形土器はない。

口縁部形態には有文無文を問わず、外反するもの・直行するもの・頸部から口縁部にかけて外反して口縁端部が内側を向くものがあるが、全体的には外反するものが多い。口唇部を平坦に仕上げるもののがほとんどであるが、丸く仕上げるものも数点ある。また、口縁部肥厚帯の断面では三角形・多少間延びした三角形・四角形に近いものがある。断面が四角形のものも胎土・焼成・文様等から上能野式土器の範疇に含まれる。

突帯は胴部以上に付き、突帯上に沈線を施すものとないものがある。なかには121のように突帯が胴下部に付いたり、120のように瘤状の突起つくものもあるが、胎土・焼成とともに上能野式土器の範疇に含まれると思う。

底部については、小振りの脚台がつくが、上げ底の度合いの浅いものと深いものがあると前述した。文様については、その全容をつかめるものが44の1点しかないが、基本的には1条もしくは2条の直線的な沈線で×印もしくは山形とその間をうめる横位の沈線で構成されている。文様は胴部以上に描かれるが、中には胴部以下や脚台に縦方向の沈線を施すものもある。

土器の製作については、胴部と底部の接合にその特徴が顕著に現われる。例えば132の胴部と154の底部を作る。そして、それらをはめ合わせ、胴部と底部の外側接合部分に粘土を塗付けている。その際の調整は極めて雑である。そのため出土する底部は接合のための粘土が剥落しいわゆる「芯」が剥出しになる。また、接合のための粘土を底部の接地面まで伸ばすこともある。表層出土の138の底部は「芯」を持たず、明らかにその技法に違いが見られる。139・142・145・146のように底部の上部先端は内底の一部として利用される。中には接合する粘土がよく接着するために入れたと思われる沈線が施されている。

口縁部の肥厚帯は粘土を内側に折り曲げるか貼り付けるもの、外側に折り曲げて貼り付けるもの、粘土を内側から外側に貼り付けるものがある。

他の遺跡出土の上能野式土器との比較

上能野式土器は、先の上能野貝塚の他に西之表市の横峰遺跡・椎ノ木遺跡、及び平成5年に調査が行われた嶽野中野遺跡での報告がある。横峰遺跡と椎ノ木遺跡は出土点数が数点と少ないが、断面三角形に口縁部が肥厚し、ハケによる調整、沈線での施文は本遺跡出土の土器と同じである。ただし、椎ノ木遺跡の報告書に掲載されている土器1は、口縁部肥厚帯に沈線ではなく斜位の刻みが施されている点が相違している。また、嶽野中野遺跡の出土土器との比較では、口縁部肥厚帯の断面が本遺跡の資料では三角形を呈するものが約半数あるが、嶽野中野遺跡ではそのほとんどが四角形を呈するという相違がある。文様構成についても、本遺跡では直線的な沈線が多いのに対して嶽野中野遺跡では曲線的な沈線が見受けられる。

これらの特徴を本遺跡の地層により類別することはできない。また、この特徴が地域差及び時間差を示すものかについては、現時点では出土例や資料が少なく言及することはできない。今後の資料の増加を待ちたい。

上能野式土器の時期について

上能野式土器の時期については「上能野貝塚」では弥生時代後期と位置付けている。「馬毛島埋葬址」「横峰遺跡」の報告書でも同様に扱われているが、中園聰氏は本型式を「7世紀に下る可能性は少ないと」位置付けている。また、嶽野中野遺跡の粘土層より採集された土壤の放射性炭素を年代測定し、その結果は 1880 ± 120 Y. B. P : A. D. (G a k - 18196) であった。本遺跡の調査結果からその時期等について述べなければならないが、鳥ノ峯遺跡・輪ノ尾遺跡・上能野式遺跡等の調査が概報のみでその全容が明らかになっていない現状では難しい。また、包含層から出土した土器で本報告書に掲載したものは、71・72の土器片を除いては上能野式土器と思われる。72はⅢ層出土の土師質の土器であるが、出土点数がわずか1点と少なく、同時性を示す共伴関係にはなり得ない。したがって、本遺跡においては時期を決定するような共伴がないため、確定的なことは言

えないが遺跡の立地条件等から考えてその可能性を探ってみたい。

遺跡の立地からみると、時間的な幅をもった遺跡が連続した砂丘に存在する場合、主体的に出土する遺物は海岸に近づくほど新しくなる傾向にある。本遺跡と同町にある一湊松山遺跡では、平成6・7年の調査では縄文時代前期の遺物が主に出土し、これよりも約50m海岸に近づいた地点を昭和55年に調査しているが、この時は縄文時代後期の遺物が主に出土している。また、笠利町の東海岸でも同じ例がある。

また、現砂丘の後背地に立地する県内の遺跡を概観すれば、そのほとんどは古墳時代の遺跡である。屋久町の東宮原遺跡、上甑村の江石遺跡、鹿島村の小牟田遺跡、下甑村の大原・宮薙遺跡、頬娃町の塩取口遺跡等は現砂丘の後背地に立地する古墳時代の遺跡である。

そして本遺跡の立地をみると、海岸線から約250mの地点に設定した5トレンチからは流れ込みの遺物ではあるが、弥生時代前期から中期と思われる土器と図化し得なかったが中津野式と思われる成川式土器の胴部片が出土し、上能野式土器の出土は見られない。また、海岸線から約100mの今回の調査区表層からは弥生時代の土器片は出土するが、包含層からの出土は見られない。このようなことから本遺跡も砂丘の形成とともに広がりを持つようになり、現砂丘の後背地には上能野式土器を製作し使用した人々が生活したと考える。あくまで推論ではあるが、現時点では中津野式以降の古墳時代としたい。ただし、その下限については不明である。

参考文献

「横峰遺跡」	鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(5)	1977	鹿児島県教育委員会
「馬毛島埋葬址－西之表市椎ノ木遺跡」		1980	熊本大学文学部考古学研究室
「一湊松山遺跡」	上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書	1981	上屋久町教育委員会
「上能野貝塚発掘概報」		1973	河口貞徳
「大原・宮薙遺跡」		1974	下甑村教育委員会
「鹿児島サンオーション・リゾート地域埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ」			
	鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(68)	1994	鹿児島県教育委員会
「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅳ」			
	鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(69)	1995	鹿児島県教育委員会
「嶽中野遺跡」	西之表市埋蔵文化財調査報告書(8)	1994	西之表市教育委員会
「土器様式の動態」	人類史研究 第7号	1988	人類史研究会

図 版

図版 1



発掘作業風景



石組み検出状況



B-4区遺物出土状況

図版 2

遺物出土状況(No146)



遺物出土状況(No45)



調査区西侧土層断面





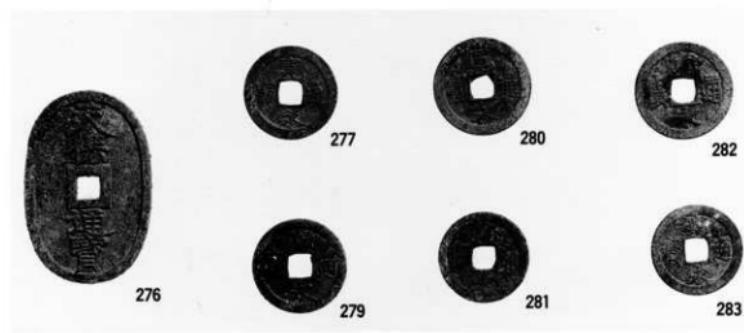
44



36

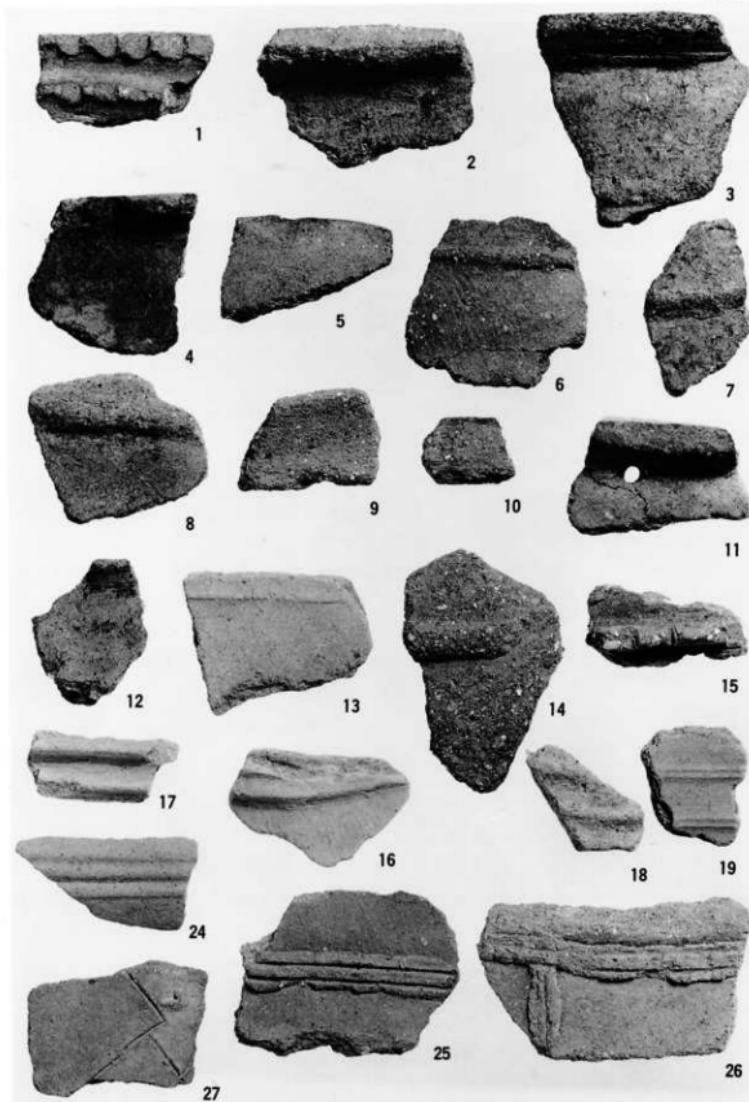
出土遺物(1)

图版 4



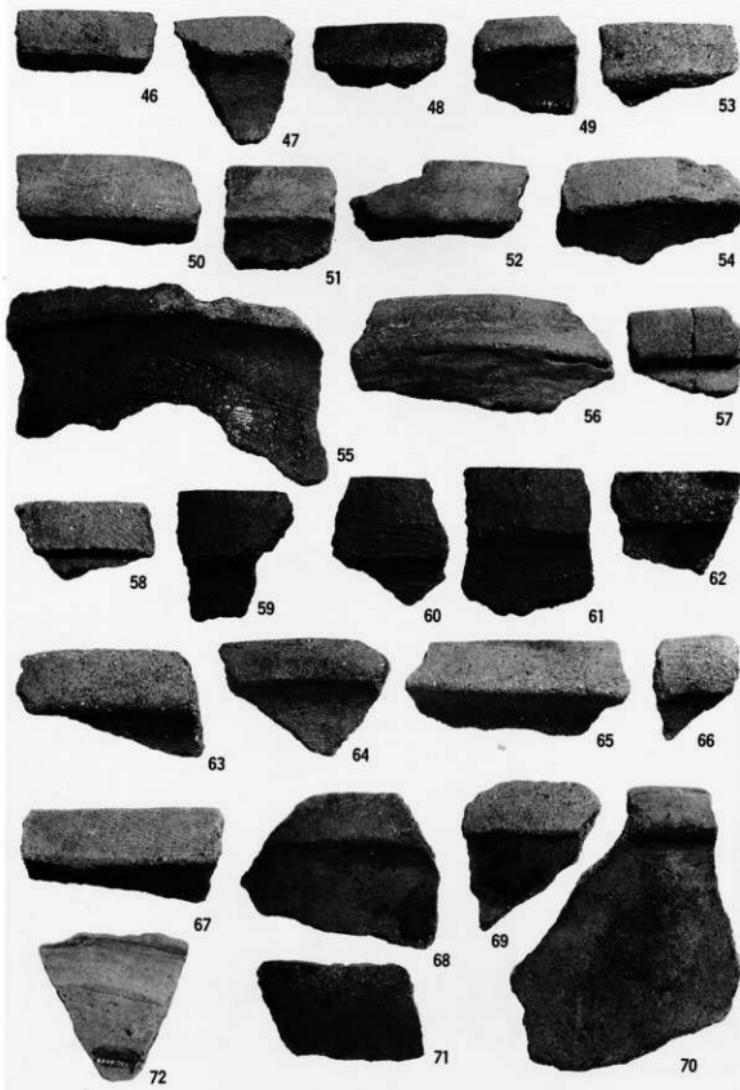
出土遗物(2)

図版 5



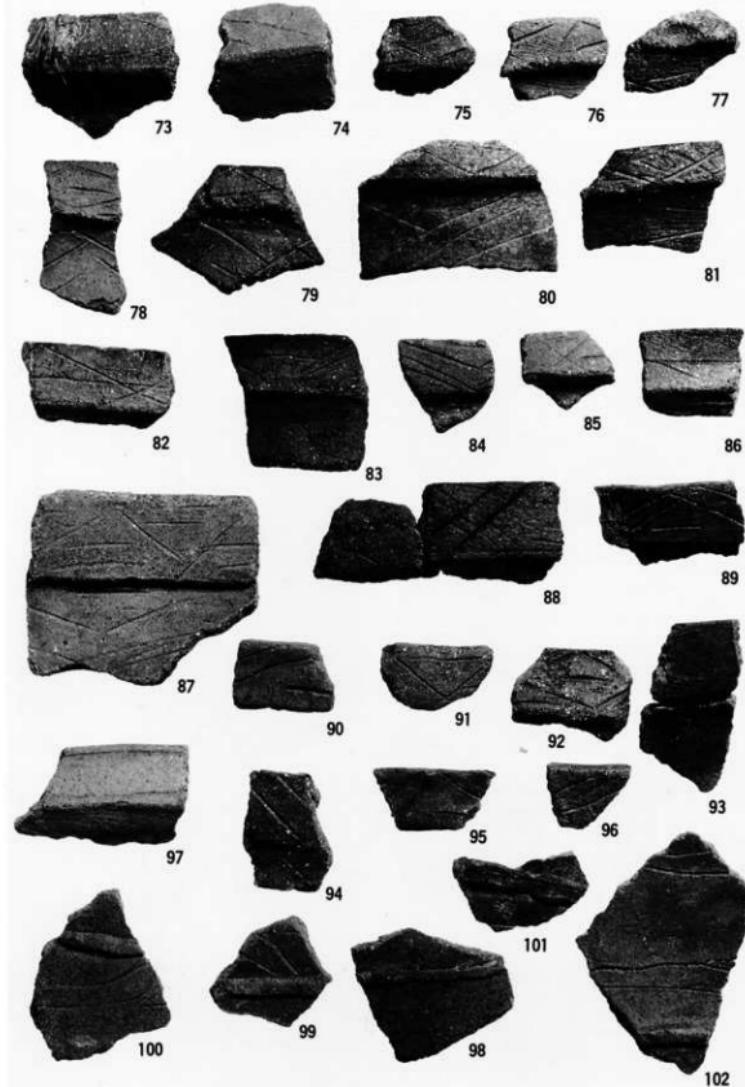
出土遺物(3)

図版 6



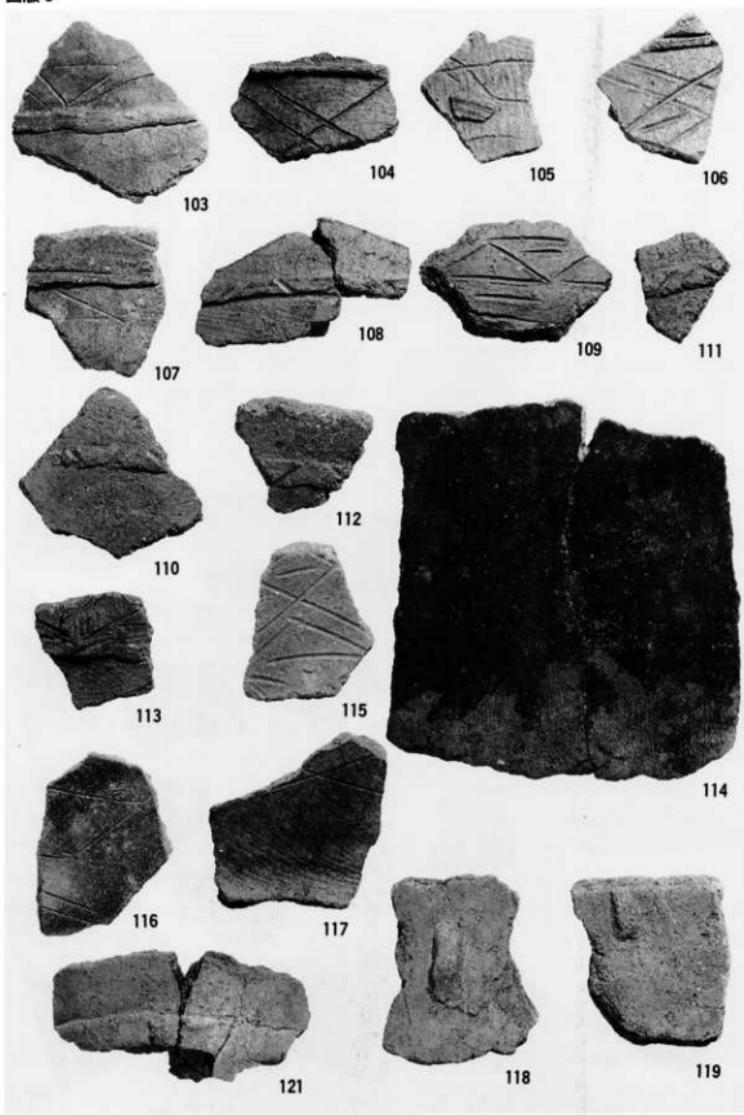
出土遺物(4)

图版 7



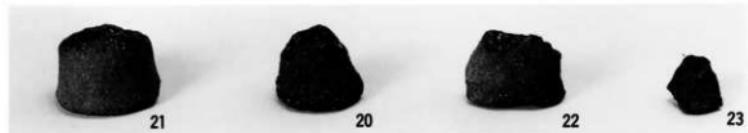
出土遗物(5)

図版 8



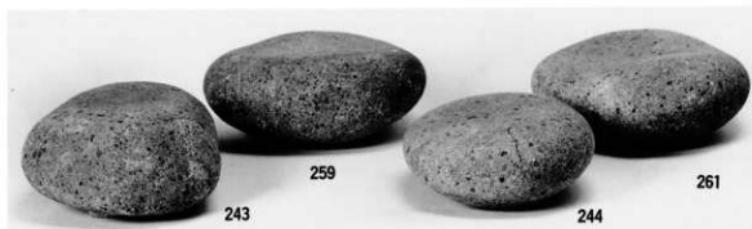
出土遺物(6)

図版 9



出土遺物(7)

図版10



出土遺物(8)

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

火ノ上山遺跡

発行日 1996年3月31日
発 行 鹿児島県埋蔵文化財センター
〒899-56 鹿児島県姶良郡姶良町平松6252番地
印 刷 鹿児島市上荒田町854-1
株式会社 朝日印刷
TEL 099-251-2191